月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.113



導力停止現象に負けず
立ち上がるリベールの人々
英雄伝説 空の軌跡SC 〜絆の在り処〜

ザナドゥ中の壁が崩壊！
犯人は…「巨乳」!?
も〜っと集まれ！ファルコム学園

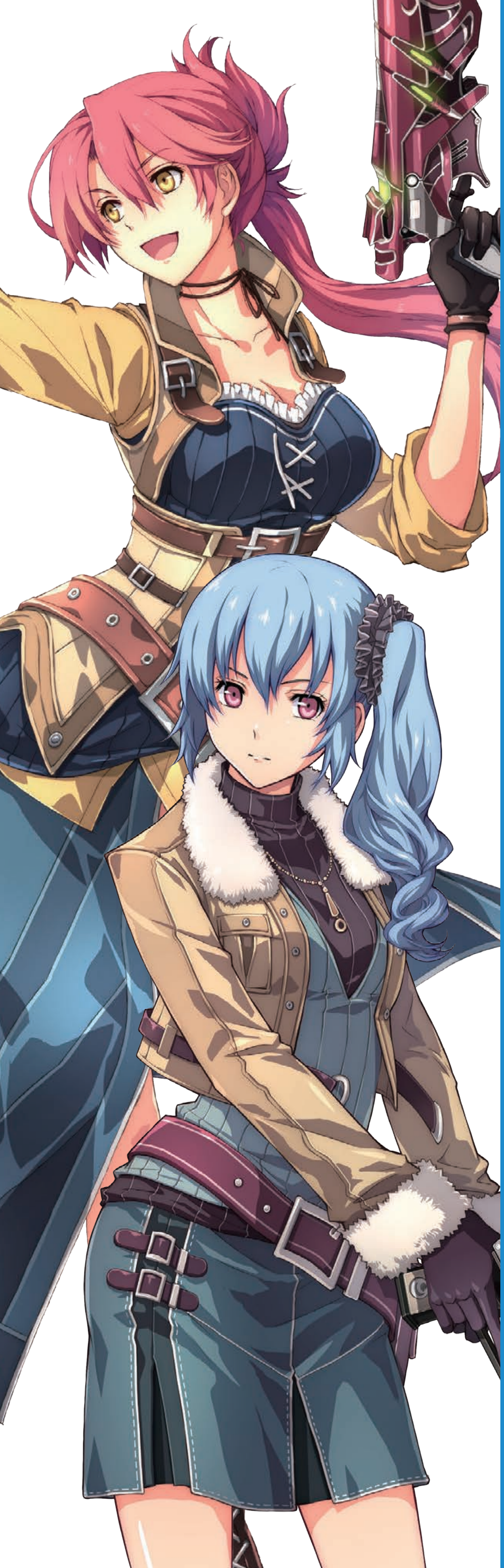
早くも『閃の軌跡Ⅳ』キャラが
衣装替えとなって登場！
『英雄伝説 暁の軌跡』

『軌跡』シリーズ始まりの物語を振り返る
英雄伝説 空の軌跡

ファルコムニュース

クロスベル旧市街の迷コンビが復活!?
さらに「夢幻回廊」の続報も！

英雄伝説 創の軌跡



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS

クロスベルの旧市街を騒がせた
あの迷（？）コンビが復活!?

THE LEGEND OF HEROES
創の軌跡
【はじまりのきせき】



今回もまだまだ各国からキャラクターたちが大集結！　かつてクロスベルの旧市街でワジ・ヘミスフィアと抗争を繰り広げていた“あの人物”が久しぶりに復活！　また、前作『閃の軌跡』シリーズでは最重要人物のひとりを担っていたクロウ・アームブラストに引き続き登場！そして、前号で明らかとなったやり込みコンテンツ「夢幻回廊」のさらなる続報も到着したぞ！

『英雄伝説 創の軌跡』公式ホームページ
https://www.falcom.co.jp/hajimari/

タイトル：英雄伝説 創の軌跡　**発売日**：2020年8月27日
ジャンル：ストーリーRPG　**対応機種**：PlayStation®4　**プレイ人数**：1人
小売価格：[通常版] 7,800円（税抜）[Platinum マイスター BOX] 10,800(税抜)
CERO レーティング：C

※画面は開発中のものです。



「さすがに俺のことは知ってるか。──“先代”としては嬉しいぜ」

クロウ・アームブラスト
CV：櫻井孝宏

トールズ士官学院で《Ⅶ組》やトワ、アンゼリカ、ジョルジュと共に学生時代を過ごした、ギャンブル好きでお調子者だが頼れる先輩。
故郷ジュライ市国を併合したオズボーン宰相に復讐を誓い、テロ組織《帝国解放戦線》のリーダー《C》として暗躍していたが内戦終盤、リィン達との共闘の末に命を落としてしまう。
その後、帝国を襲った災厄では《黒の工房》の技術によって不死者となるも、最終的には《至宝》の奇跡によって再び人間としての生を与えられた。
災厄後、一時的に故郷ジュライへ里帰りしていたが、《C》を騙る謎の人物が《新生帝国解放戦線》を立ち上げたことを知り、独自に行動を起こし始める。





ヴァルド・ヴァレス
CV：龍谷修武

「誰に笑われようが関係ねぇ。“誇り”は掲げてこその男ってモンだろ」



七耀教会の守護騎士・ワジを補佐している偉丈夫の従騎士。かつては不良グループ《サーベルバイパー》のヘッドとして暴れまわっていたが、薬物グノーシスによる《魔人化》の影響で心身に異常を来たし、アルテリア法国で治療を受けることになった。
その後、様々なハンデを抱えながらも薬物治療と七耀教会での勉学に励み晴れてワジ付きの従騎士として認められることになった。
以前よりも落ち着いた印象を受けるが、不良だった頃のハングリー精神は忘れていないらしく現在もワジをライバル視しているという。





ガルシア・ロッシ

CV：江川央生



「ハンパな覚悟で戦場に出てきてんじゃねぇぞ――ロイド・バニングス！」

《キリングベア》の異名で知られる剛腕で、純粋なパワーのぶつかり合いによる肉弾戦を好む大男。
若い頃から裏社会の人間として猟兵団《西風の旅団》やマフィア《ルバーチェ商会》を渡り歩き、クロスベルではツァオ・リー率いる《黒月》と抗争を繰り広げていた。
数々の罪を犯してきた人物ではあるが、仁義に厚くスジを通す性格で、その点だけは捜査官であるロイドからも信頼されている。
七耀暦1204年に起こったクロスベル独立国事件では国防軍によって収監されたロイドを叱咤激励し脱走に協力。その後は大人しく国防軍に捕まり、獄中で罪を償う道を選んだ。





《神速》のデュバリィ

CV：大空直美



「悪党ども！《鉄機隊》の名に懸けて、わたくしが懲らしめてやりますわ――！」

結社《身喰らう蛇》で《鉄機隊》の筆頭隊士を務める戦乙女。《神速》の異名をとる高速剣を持ち味としている。
災厄《巨イナル黄昏》では、結社で不可解な動きを見せていた主（マスター）・アリアンロードに真意を問いただすため距離を置き、対立関係にあったリィンたち新旧《Ⅶ組》に一時的に協力。
《Ⅶ組》と行動を共にしたこと、アリアンロードの想いを知り、その最後を看取ったことが剣士として、人間としてのデュバリィを成長させることとなった。
その後は結社に身を置きながらも、主なき《鉄機隊》の筆頭隊士として己の正義を貫くことを決意。
再び甲冑を身に纏い、クロスベルで暗躍する衛士たちの前に姿を現す。





クレア・リーヴェルト

CV：小清水亜美



「いつかきっと――また自分を好きになれる日が来るはずですから」

鉄道憲兵隊（TMP）に所属する特務少佐にして、かつての《鉄血の子供達（アイアンブリード）》の一員。
オズボーン宰相に深い恩を感じており、帝国を襲った《災厄》では宰相の駒として非情に徹し、リィンたち新旧《Ⅶ組》と敵対。勝敗が決した際は自決まで覚悟していたがその後考えを改め、災厄後は帝国を立て直すために政府直属の立場を失ったTMPに籍を置くこととなった。
現在は自由が制限されたTMPの中で、自分自身を責め続けるように仕事漬けの日々を送っている。







サラ・バレスタイン

CV：豊口めぐみ



「背中くらい、いくらでも押してやるわよ。“カッコいいお姉さん組”としてね」

かつてリィンたち旧《Ⅶ組》の担当教官を務めていた、《紫電》の異名を持つ凄腕のA級遊撃士。
ノーザンブリア自治州出身の戦災孤児で、猟兵団《北の猟兵》を立ち上げた「バレスタイン大佐」に育てられた過去を持つ。
黙っていれば美人だが、酒グセが悪く私生活がだらしないという残念なところは相変わらず。
帝国を襲った災厄後は遊撃士としての活動を本格的に再開。
再独立を機に活動を再開させたクロスベル支部や後輩遊撃士のフィーとも連携を取りつつゼムリア各地で精力的に仕事をこなしている。





『閃の軌跡』シリーズでも好評を博した攻略型コンテンツ

「夢幻回廊」が「真・夢幻回廊」となりさらなるパワーアップを遂げて登場！

『創の軌跡』のメインストーリーを進めていくことで、各ルートから謎に満ちた異空間「夢幻回廊」へアクセスすることができるようになることが判明！
「夢幻回廊」は複数の階層に分かれた広大なダンジョンで構成されており、その構造はアクセスするたびにランダム生成されるようだ。
「夢幻回廊」を攻略していくと進行度に応じて様々な要素を解放、強化することができる上、メインストーリー攻略中でも自由に行き来できるので、逐次攻略していきたい。
また、「夢幻回廊」は各ルートのキャラクターが集合しているので、この空間内では自由にパーティー編成ができるので、好きなキャラクターを組み合わせて進めていこう。

「夢幻回廊」の新システム、そしてミニゲームやエピソードも大公開！

前号に引き続き『創の軌跡』のやり込みコンテンツ「夢幻回廊」の新システムの情報が明らかに！
さらに、本編とはべつのコンテンツとして楽しむことができるミニゲームやエピソードの一部も到着したぞ！

探索パーティ以外のメンバーが挑む総力戦！『スクランブルレイド』

「夢幻回廊」のダンジョン内では一部の宝箱の周囲に《虚無の楔》が打ち込まれており、 外部から接触することができない状態になっている。これを調べることで、楔を解除するための特殊戦闘『スクランブルレイド』を発生させることができるのだ。

『スクランブルレイド』の流れ

❶「夢幻回廊」探索メンバー以外の待機メンバーから、ランダムでパーティが選択されます。
❷ 装備、オーブメント、戦術リンク等の設定を行います。
❸ 設定が完了すると、敵とのバトルがスタートします。
❹ 勝利することで《虚無の楔》が解除され、宝箱から「封印石」やレア装備品等を獲得することができます。







謎のゲートに侵入してエリアを攻略！レアなアイテムをGETしよう！『幻想丘陵』

攻略を進めていくとまれに謎のゲートが出現、これに侵入することで、『幻想丘陵』と呼ばれる特殊エリアを攻略することが可能に。エリア内には空や自然の地形が広がっており、「夢幻回廊」とはまったく違う構造となっているのだ。このエリアには「封印石（エピソードやプレイアブルキャラ解放用のアイテム）」を落とす“守護魔獣”やセピスを獲得できるブレイクオブジェが多数配置されているなどプレイヤー側が有利となるボーナス要素が多く含まれているとのことだ。このエリアはゲート侵入時にランダムで構造や時間帯が決定され、その構造や、時間帯にあわせて出現する魔獣の種類も変化するということなので、逃さずにチャレンジしてみよう。





「封印石」を開封することで解放されるエピソードやミニゲームとは？

「夢幻回廊」に登場する強敵“守護魔獣”を撃破することで手に入れることができる「封印石」を開封することでキャラクターの「エピソード」や、「ミニゲーム」といったコンテンツが解放されていく。
今回はそれらのコンテンツから一部の情報を大公開！

《エピソード：「再会～乙女の憂鬱～」》

《巨イナル黄昏》による混乱も収まり、かつての平穏を取り戻した帝都。
そこでは、“不可視化”の技術を持つ何者かがTMP（鉄道憲兵隊）の詰所に侵入し、軍関係の情報を盗むという事件が発生していた。共和国の部隊「ハーキュリーズ」や結社《身喰らう蛇》の関与を疑ったクレア少佐はサラ、シャロンにも協力を要請し、犯人の追跡調査に乗り出す。
そんな中、クレアの後ろ姿を憎しみと困惑の目で見つめるある女性の姿があった――。







英雄伝説
閃の軌跡06

原作／日本ファルコム
脚本／恵村まお　漫画／さがら梨々
A5判　160P　定価：本体991円+税
ISBN 978-4-8021-3123-0

好評発売中!!

エレボニア帝国に吹き荒れる陰謀の嵐！
時代が選ぶのは果たして誰か!?
そして友という絆に背を向け、
両雄相まみえる！
激動のクライマックス！

発行：フィールドワイ　フィールドワイ公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp
発売：メディアパル　ファルコムブックス公式HPはこちら➔www.field-y.co.jp/falcombooks

《エピソード：「光まとう門出」》

結婚式を直前に控えたある日の帝都・バルフレイム宮。
オリヴァルト皇子がゼクス、ミュラーと今後の生活について語りあう一方、皇室の伝統的な様式で仕立てられたウェディングドレスを前に、プリシラ皇妃に自らの不安を打ち明けるシェラザード。
互いの要件を終え、控え室へと戻った二人の目に飛び込んできたのは——
ある人物からの意外なメッセージカードだった。







《ミニゲーム：「魔法少女まじかる☆アリサRS」》

STORY

熾烈な戦いの末、互いに分かり合えたハズの魔法少女アリサ、ラウラ、エマと魔界皇子リィン。
しかし、魔王の死をきっかけに豹変した魔界皇子が再び人間界への侵攻を開始する。
一方、人間界ではアリサの後輩たちが新たな魔法少女の力に目覚めようとしていた——！





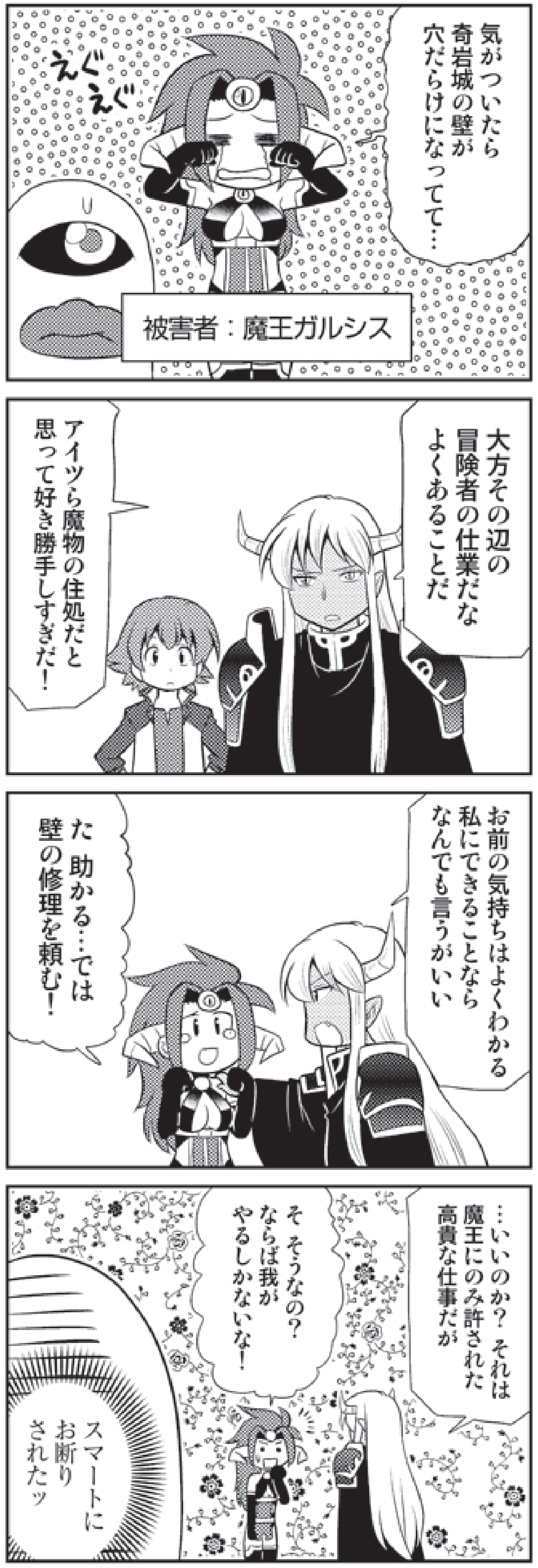


「ミニゲーム」はストーリー仕立てで進行していくまさかの3Dシューティングゲーム!?　敵のシールドを破壊するチャージショットや、敵の弾を打ち消しつつ特大ダメージを与えるスペシャルショットといった様々な攻撃。さらに、仲間のアシストスキルなどを駆使し、魔王軍に立ち向かえ！

★ザナドゥに事件発生！緊急出動だ！★



魔王のおしごと



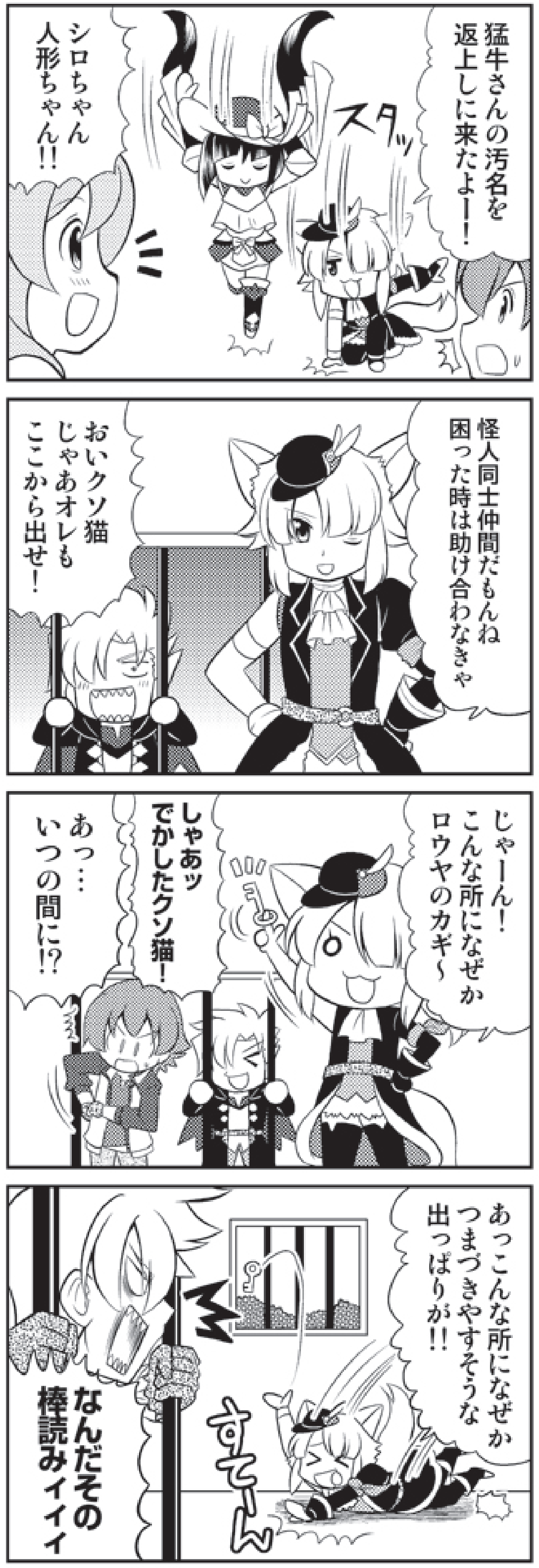
容疑者M



信用できる人



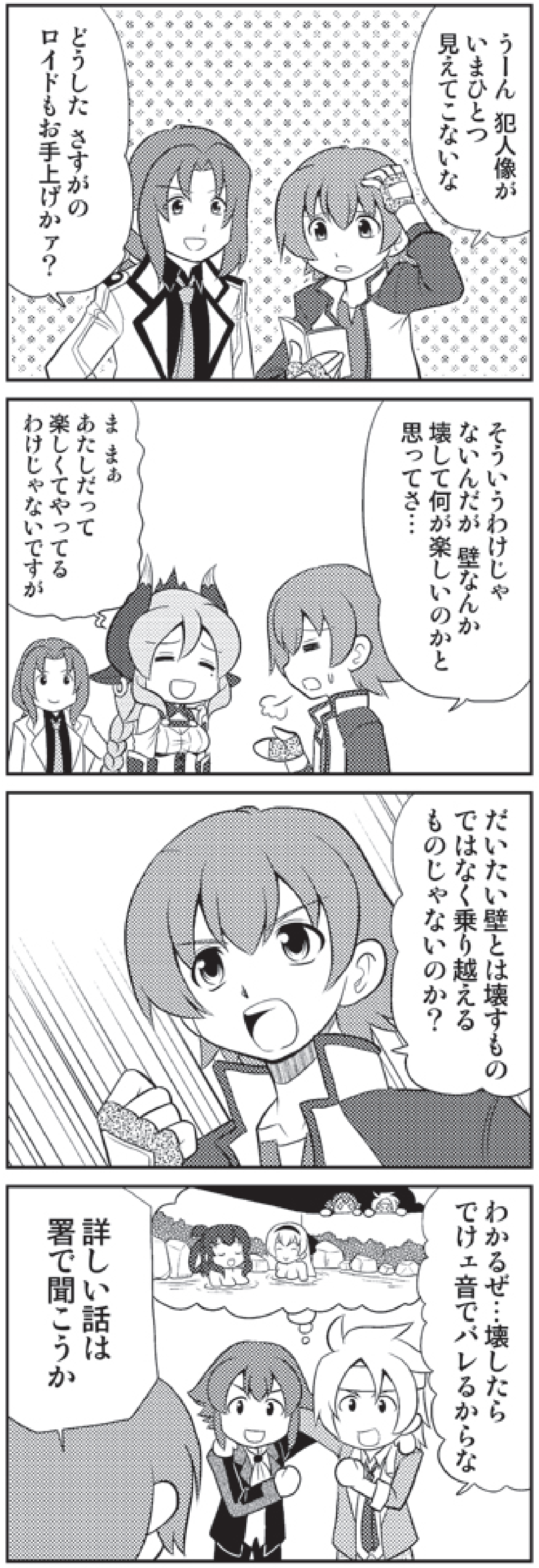
助っ人参上



刑事の勘



捜査官の主張



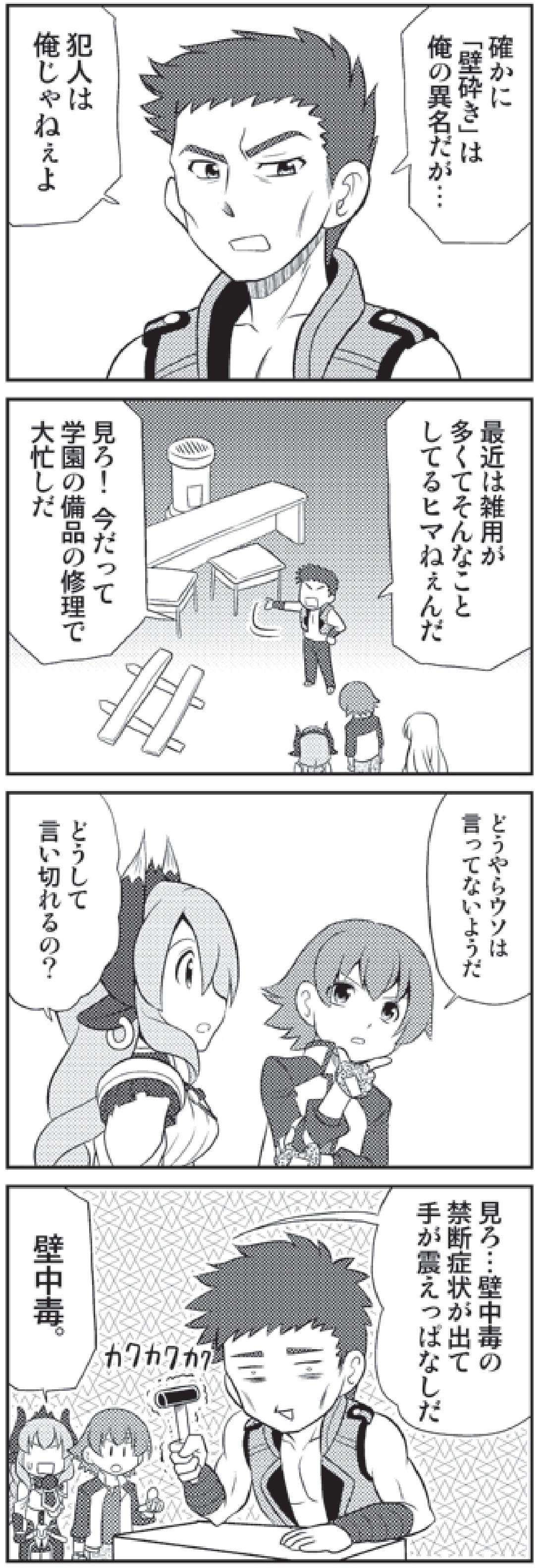
能力者たち



鈍器なコミュニティ



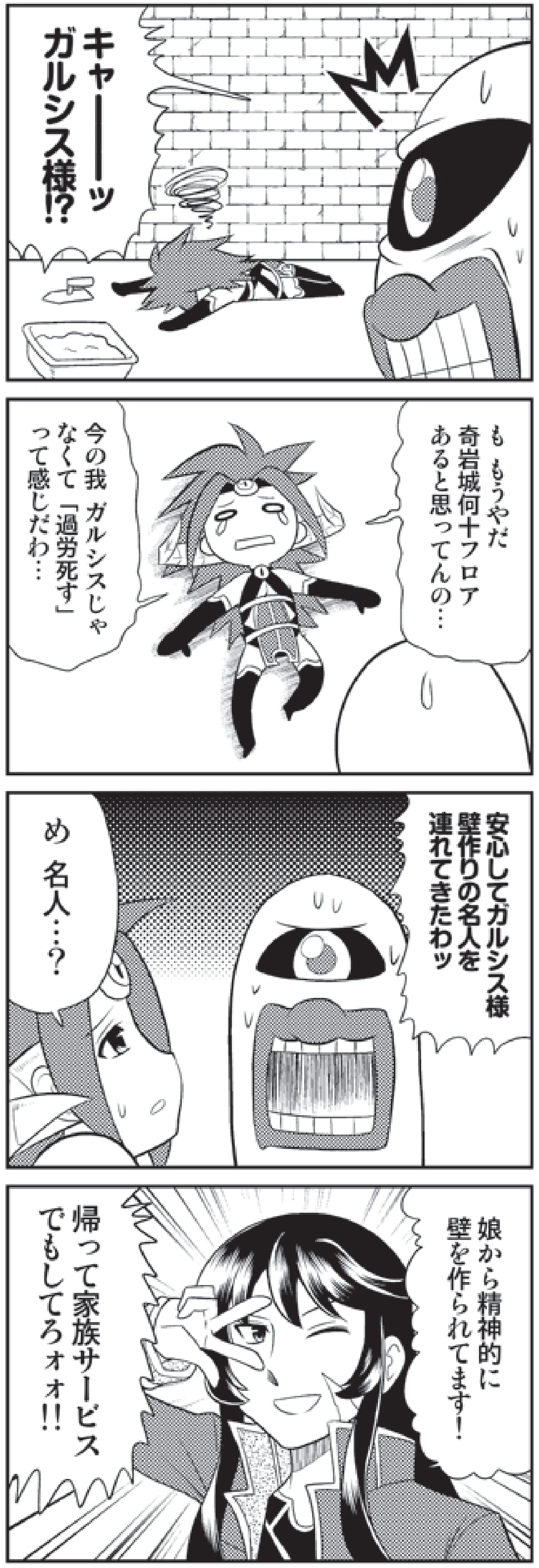
容疑者D



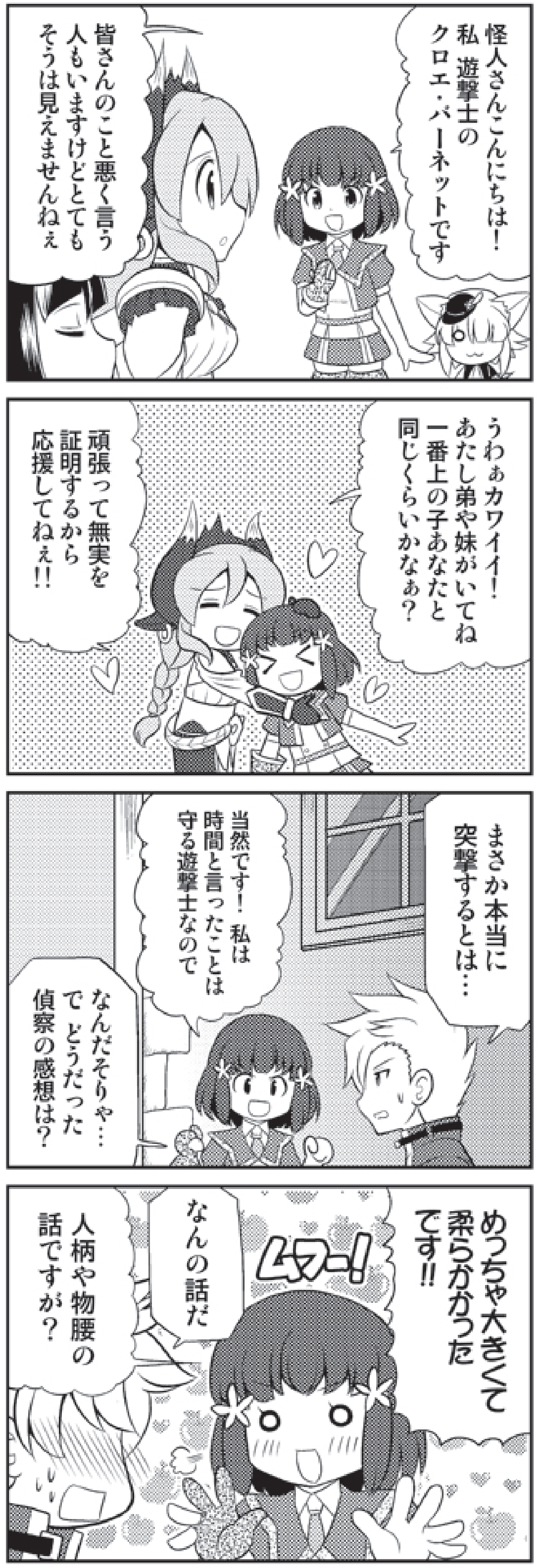
壁といえば



魔王と名人



クロエの感想



簡単なトリック



犯人は巨乳




FB ファルコムBOOKS
空の軌跡外伝
レーヴェ物語
作画：楽時たらひ 脚本：田沢大典
『空の軌跡』が始まる――
もうひとつの
原作：日本ファルコム
（『英雄伝説 空の軌跡』）
価格：893円(税込)
ISBN:978-489610-224-6
『英雄伝説 空の軌跡』の人気キャラクター・《剣帝》レオンハルトの過去を描くアウターストーリーのコミカライズ。彼はいかにして《身喰らう蛇》に与みし、数奇な運命を辿ったのか。レオンハルトの目線から見たもうひとつの『空の軌跡』の物語が始まる！ ©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
全国書店にて大好評発売中!!
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


異世界《ザナドゥ》に勇者よ再び！
も～っと集まれ！
ファルコム学園
①
著者：新久保だいすけ
定価：本体900円＋税
学園生活を満喫していたが、全員が元の世界に戻っていった英雄・戦士達。しかし、再び彼らは伝説の桃源郷《ザナドゥ》へと帰ってきた！ 果たしてその理由とは!?
奇才・新久保だいすけが贈る、お待ちかねのシーズンⅡ、リスタート！
ISBN:978-4-8021-3138-4
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©DAISUKE ARAKUBO
©2019 FIELD-Y
FB ファルコムBOOKS
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks


空の軌跡SC
～絆の在り処～
漫画_啄木鳥しんき
原作_日本ファルコム
ほんとによかったわね
大切なお友達を助けることができて！
けど
事態を甘く見すぎていたかもしれない

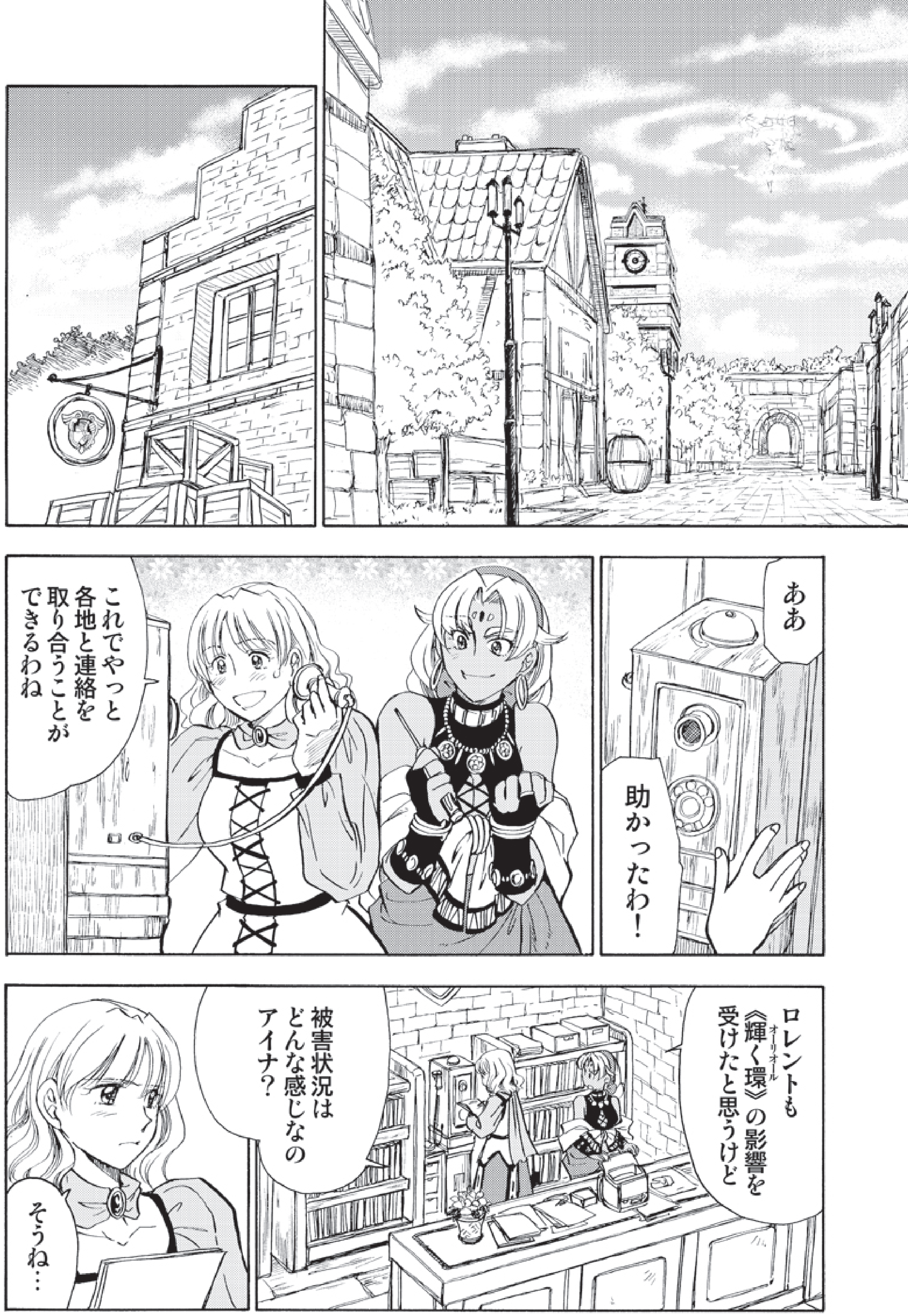

結社の思惑通り《輝く環(オーリオール)》が出現した
その影響で導力停止現象が起こり
巻き込まれたリベール王国は未曾有の混乱に陥っている…
…だけど
あの人が
それだけで済ませるわけがないんだ
あの人って
もしかして
アルバ教授…

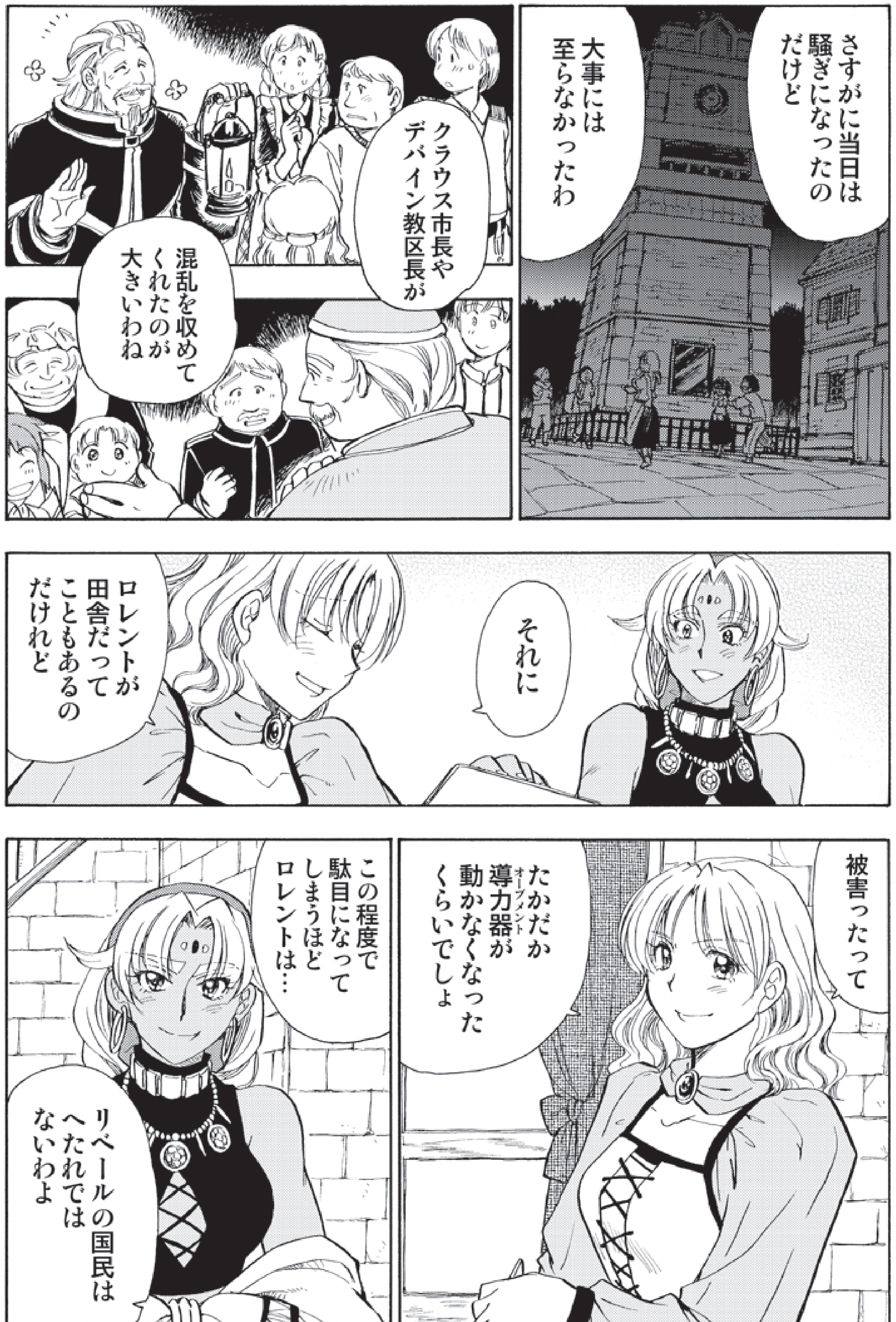

カンパネルラも言っていただろ？
ワイスマンの人となりを
彼は弱りきった獲物を
黙って見過ごすような人物じゃない
それって…
まだ…
王国に何か仕掛けてくるつもりだってこと!?

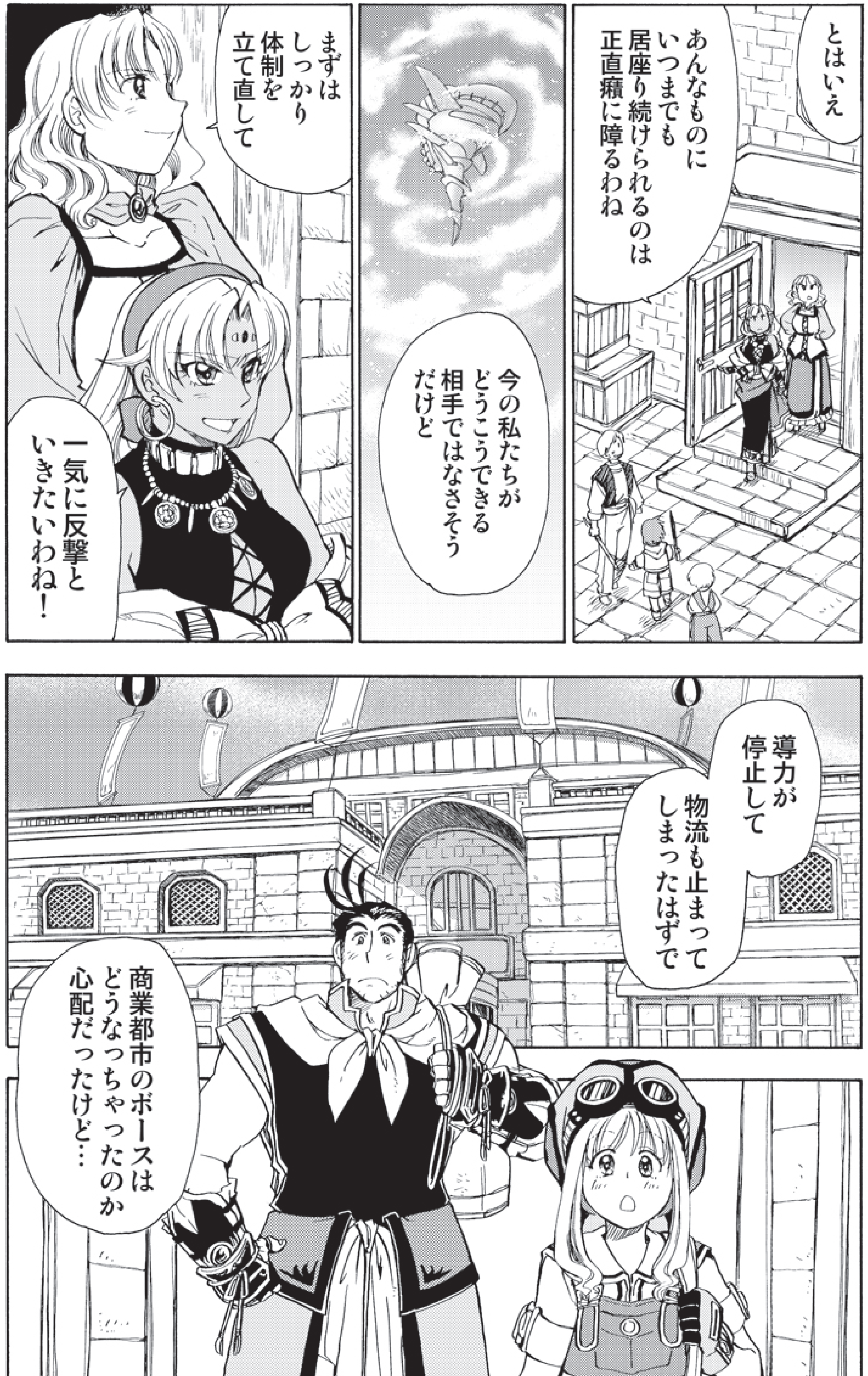

そんな…だって今のリベールは武器を持って戦うどころか
灯りひとつ点けることも難しい状態なのよ…!?
そんな時に敵が攻めてくるなんて
あたしたちはどうすればいいの!?
とりあえずは
地道にやるしかないんじゃないかい？
あの浮遊島をなんとかするのが一番の解決方法なんだろうけど
対策が見つかってないんだからぐだぐだ悩んでても仕方ないんだし


でも今回みたいに
困ってる人たちを
助けるお手伝いなら
私たちにだって
できるよね！
不安が消え去れば
人々は混乱から
脱却できるはずだ
そうなったら
何がこようと
我らが
リベール王国は
無敵だぜ！
だいたい
あんたたち
だけが
リベールの危機を
しょい込む必要
なんてないのさ
王立学園の
生徒会長さんも
言っていただろ？
見くびらないで
ほしいって
あたしたち
だって
自分で
なんとかできる
力くらいは
持ってるんだよ

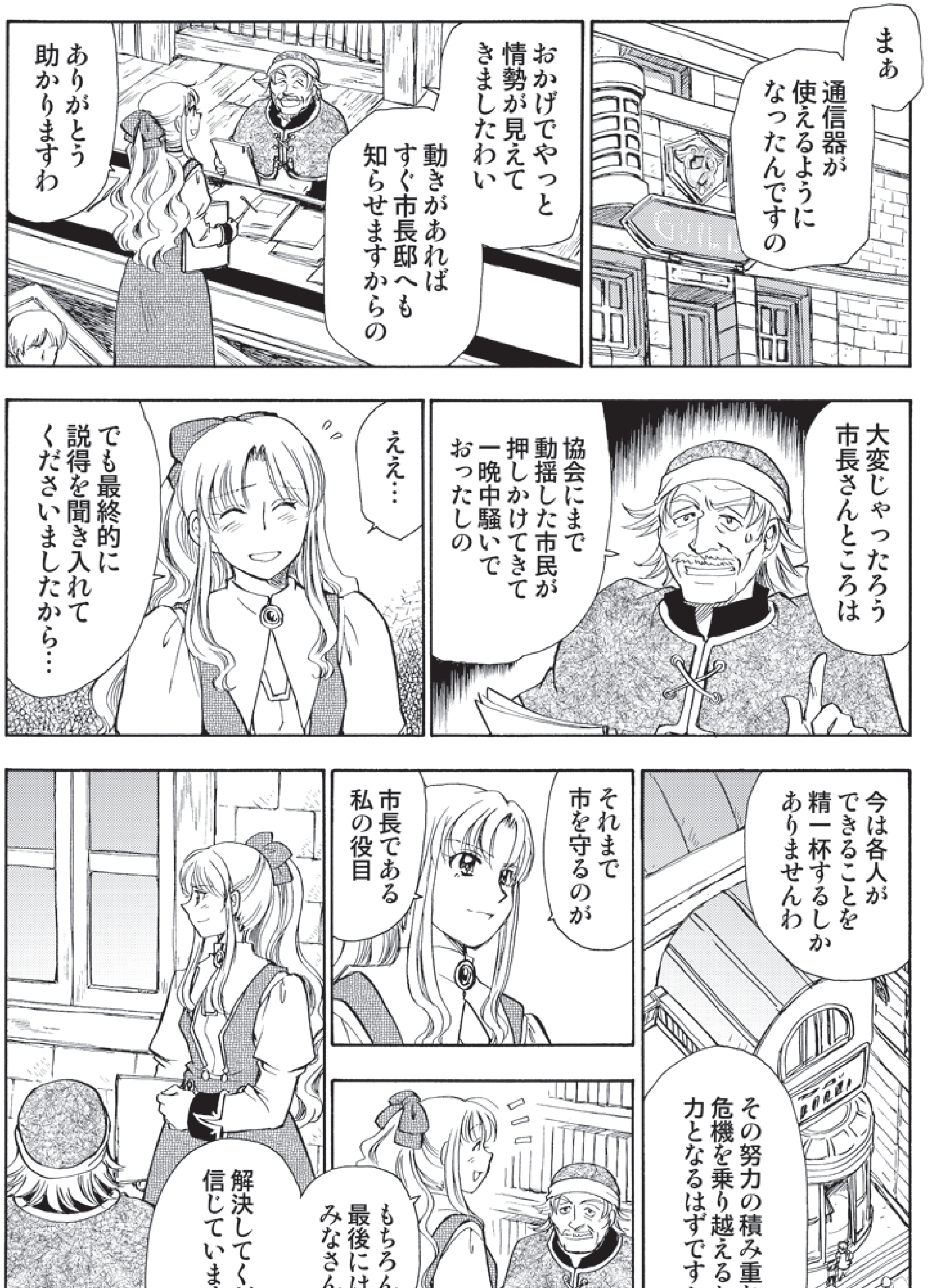

まぁ
ひとりの
力は
ほんの
小さな
ものだけど
その力を
あわせれば
どんな困難も
ひっくり返すことが
できるってね！
我々はこのまま
各地の見回りを
続けてみるつもりだ
お願いします！
あたしたちも
早く通信機を
届けなきゃ！
それから
万が一に備えて
警戒を強めるよう
報告しておいた
ほうがいいね


ああ
助かったわ！
これでやっと各地と連絡を取り合うことができるわね
ロレントも《輝く環(オーリオール)》の影響を受けたと思うけど
被害状況はどんな感じなのアイナ？
そうね…

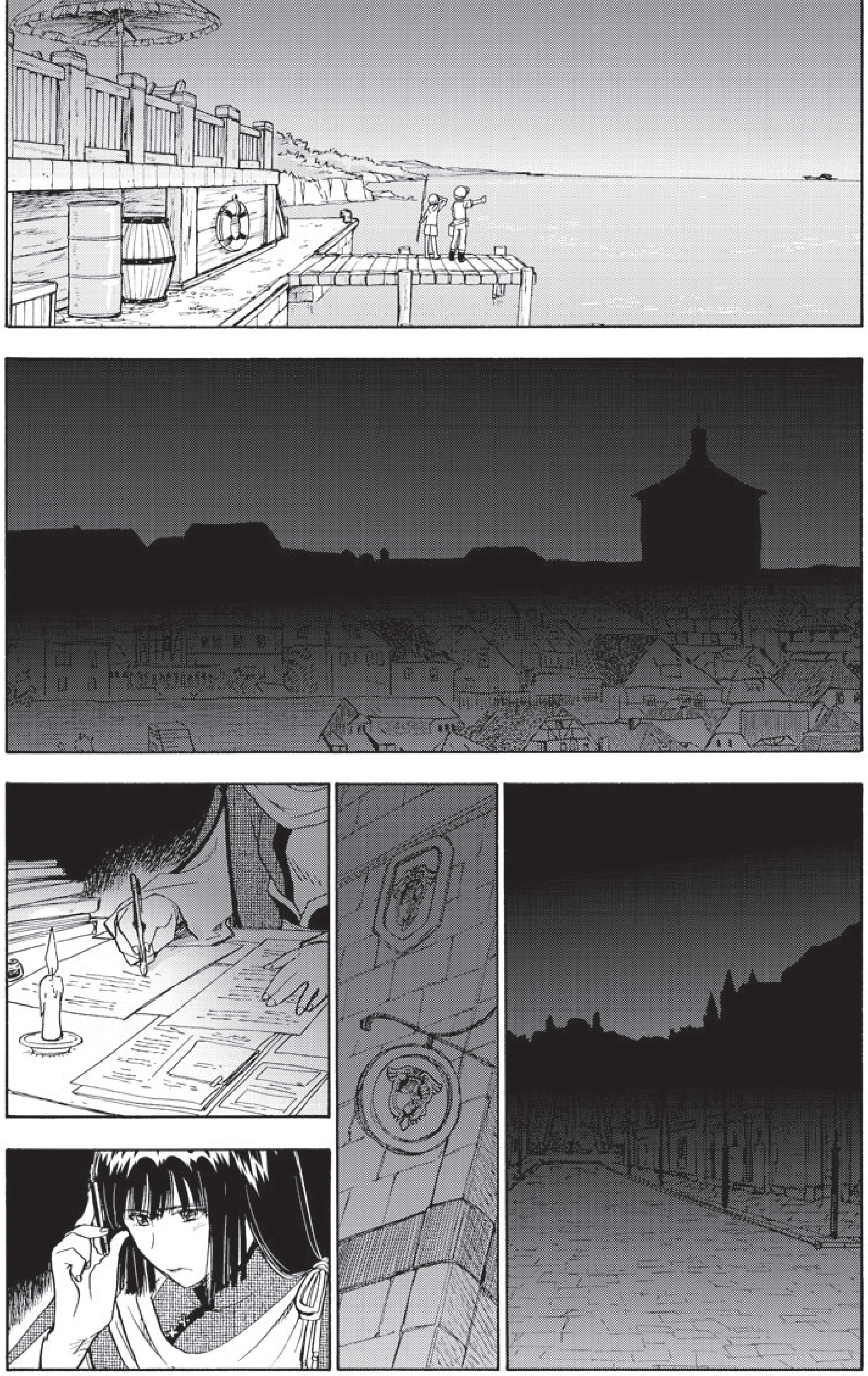

さすがに当日は騒ぎになったのだけど
大事には至らなかったわ
クラウス市長やデバイン教区長が
混乱を収めてくれたのが大きいわね
それに
ロレントが田舎だってこともあるのだけれど
被害ったって
たかだか導力器(オーブメント)が動かなくなったくらいでしょ
この程度で駄目になってしまうほどロレントは…
リベールの国民はへたれではないわよ

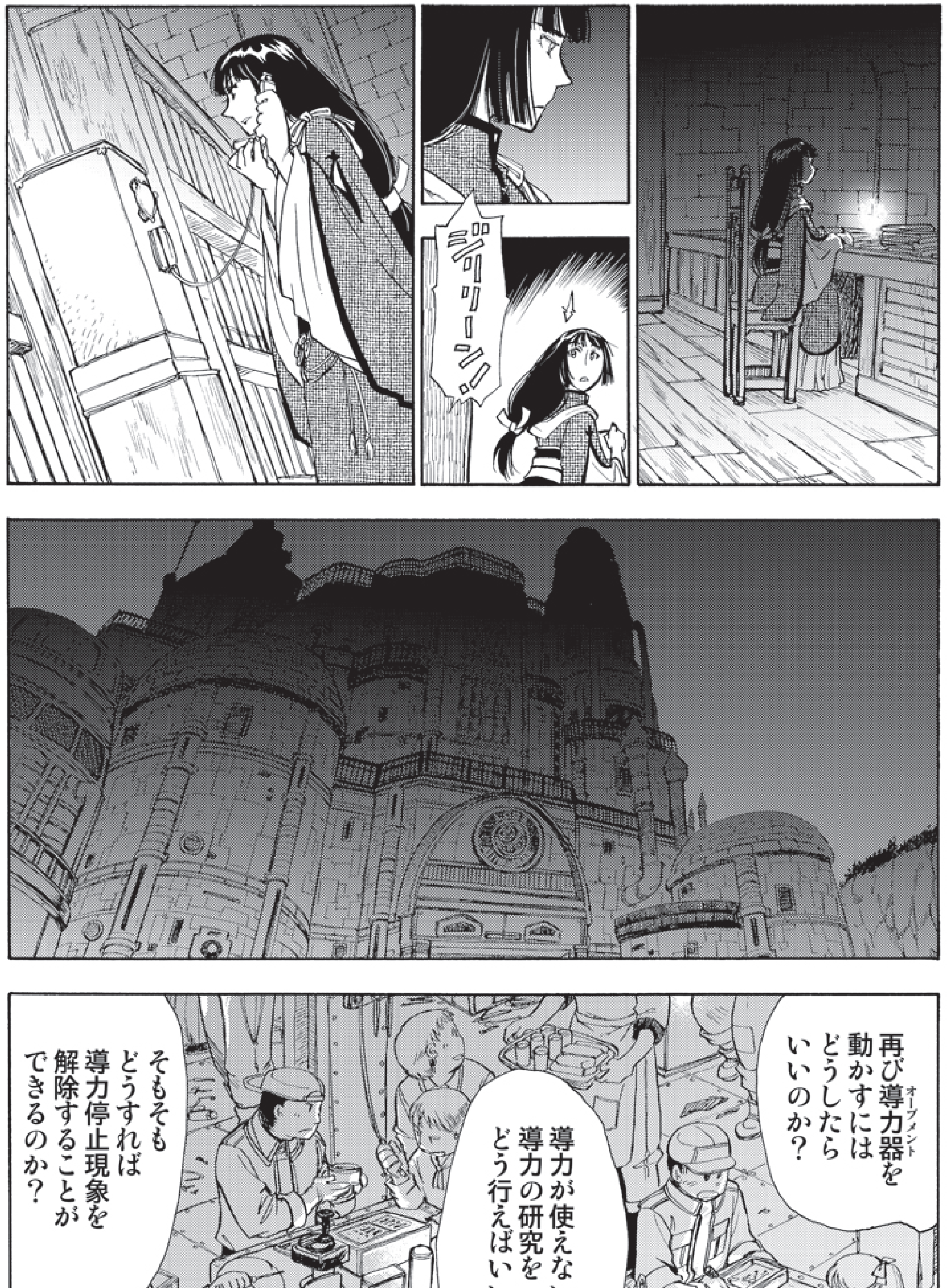

とはいえ
あんなものにいつまでも居座り続けられるのは正直癪に障るわね
まずはしっかり体制を立て直して
今の私たちがどうこうできる相手ではなさそうだけど
一気に反撃といきたいわね!
導力が停止して物流も止まってしまったはずで
商業都市のボスはどうなっちゃったのか心配だったけど…


な…なんだか
前に来た時よりも
みんな元気そう…
そりゃマーケットあげての大セール中だからね!
なんでも市長さんや大商人たちのおかげで在庫が確保できたんですって
まぁぁ
ありがたいわぁ
マーケットに活気があるとこっちまで明るい気持ちになるわねぇ
キャー
こんな時だからこそ商売人は商売人のやり方で
街を元気にしていかなきゃな!
うむ!
そんなわけでおひとつどうだい!?
安くしとくよ!


まぁ
通信器が使えるようになったんですの
おかげでやっと情勢が見えてきましたわい
動きがあればすぐ市長邸へも知らせますからの
ありがとう助かりますわ
大変じゃったろう市長さんとところは
協会にまで動揺した市民が押しかけてきて一晩中騒いでおったしの
ええ…
でも最終的に説得を聞き入れてくださいましたから…
今は各人ができることを精一杯するしかありませんわ
その努力の積み重ねが危機を乗り越えるための力となるはずですから
それまで市を守るのが
市長である私の役目
もちろん最後にはみなさんが
解決してくださると信じていますわ

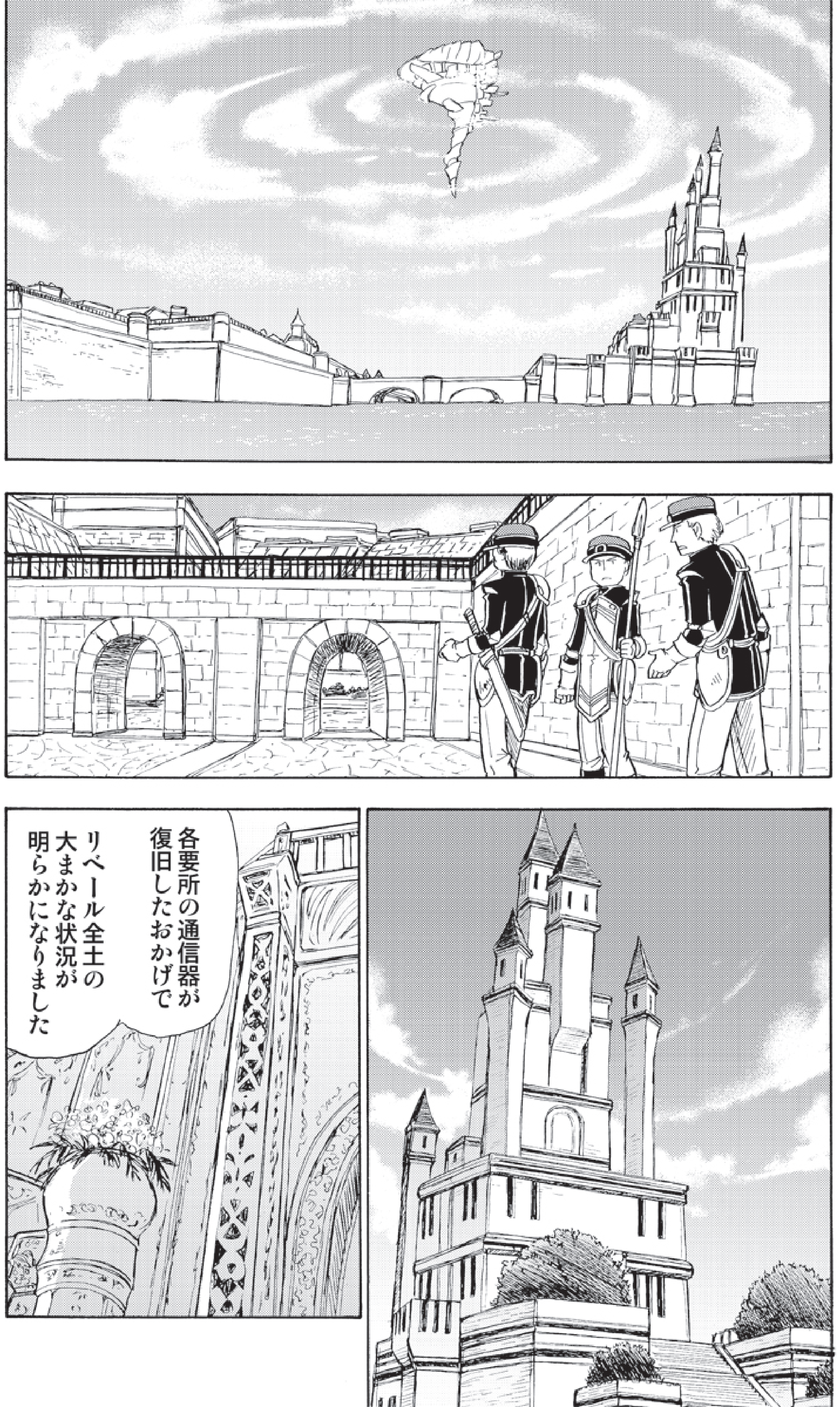

おおアガット
村の様子を見に来てくれたのか
まぁ…そんなところだ
この辺りで正体不明の魔獣が異常発生してるらしくてな
ただでさえ導力停止現象でてんてこまいになってるってのによ
今のところは平穏じゃよ
おーアガットー!
もともとうちの村は導力化が進んでおらんのでそこまで不便はしてないしのぅ
そっか
しかし導力器オーブメントが使えんというのは深刻な問題じゃな
特に
王国軍にとっては大事じゃろう
10年前のように帝国軍が攻めてきても
今の王国軍には戦いに使える武器がないんじゃ
不戦条約が結ばれたとはいえ
やはりわしらは帝国軍の動きが気になるのぅ




ジリリーン!!
再び導力器(オーブメント)を動かすにはどうしたらいいのか?
導力が使えない状態で導力の研究をどう行えばいいのか?
そもそもどうすれば導力停止現象を解除することができるのか?

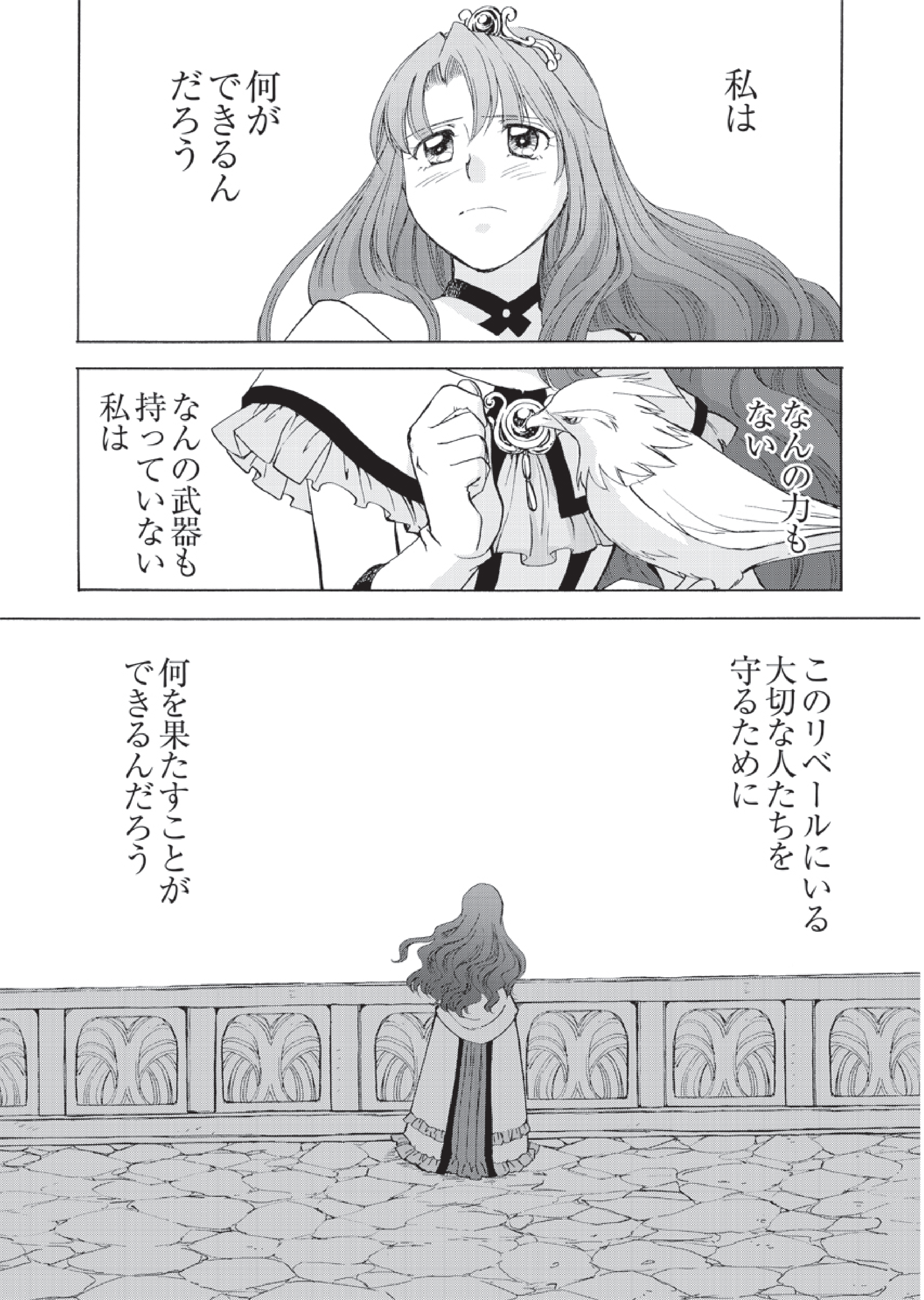

ああもう…
問題が山積みすぎて
なにがなんだか…
工房長ー
工房長〜
ええい!!
うろたえるなマードック!
導力最大の危機に導力研究者がふんばらんでどうする!?
今やらねばならんことはただひとつ!
どん!
一刻も早くこいつを仕上げることじゃ!
余計なことは考えずわしらはわしらで人事を尽くせばいい!
ジリリーン
さすれば志を同じくする者たちがわしらにできんことも成し遂げてくれる!
ほらの!



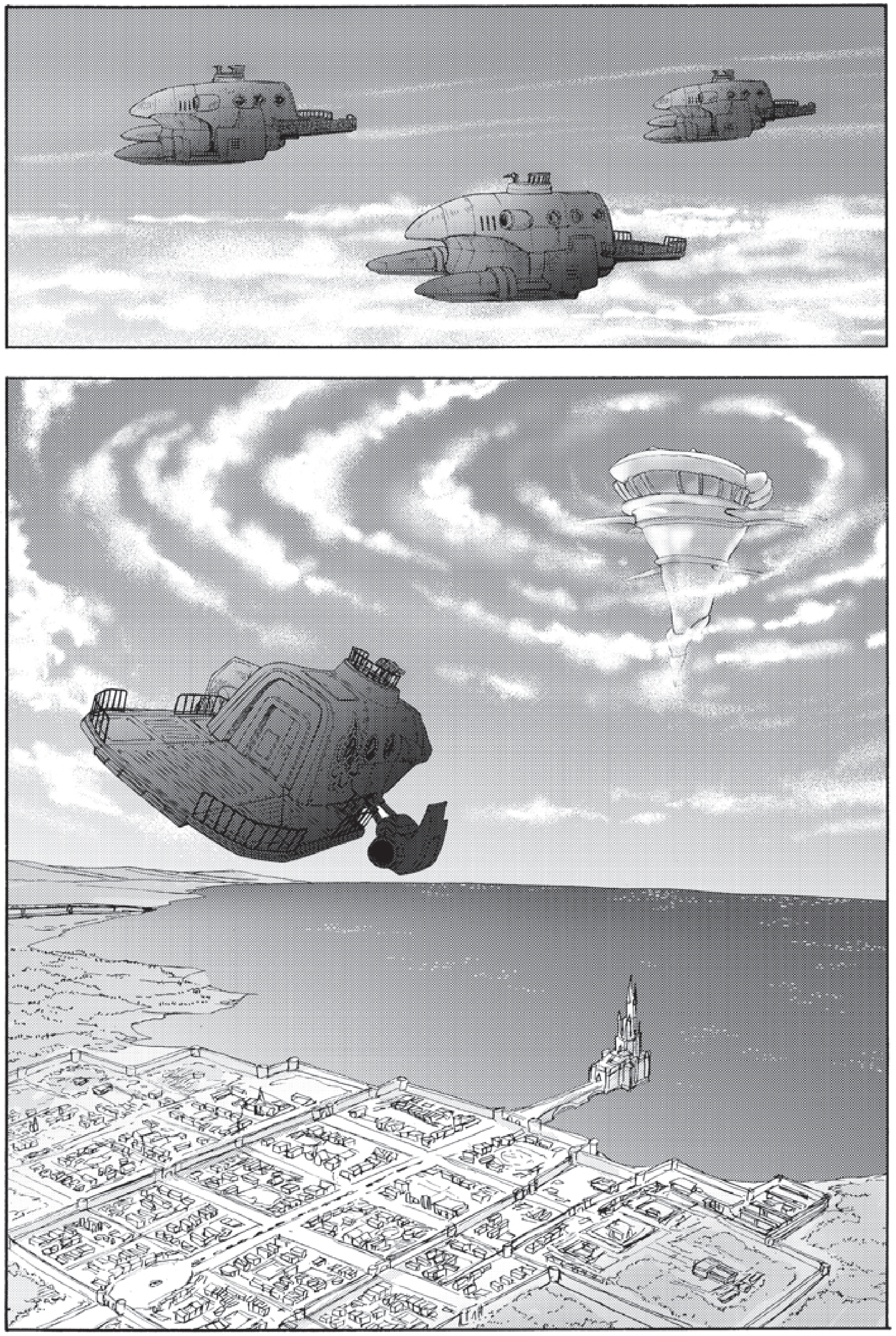

各要所の通信器が復旧したおかげで
リベール全土の大まかな状況が明らかになりました


導力は未だ回復の兆しなし
各地で市民による騒動が起きたとのこと
物流の停止による物資不足が懸念されます
防衛力の低下は深刻な問題です
わかりました
魔獣の異常発生が…
ヴァレリア湖内に未確認物体の…
帝国の動きは…
早急の軍の派遣を…
引き続き各地の治安の安定に全力を尽くしてください
大丈夫
みなさんにはわたくしが
リベール国王がついています


ぴゅーい♪
ジーク!
…そう 学園のみんなは無事に救出されたのね
よかった
ジークも… 本当にありがとうね
結社の計画がとうとう形になって現れて
リベール王国は混乱に陥っている
だけど それを乗り越えるために
たくさんの人々が全力で困難と戦ってくれているの…


私は
何ができるんだろう
なんの力もない
なんの武器も持っていない 私は
このリベールにいる大切な人たちを守るために
何を果たすことができるんだろう


英雄伝説
空の軌跡SC
ソラノキセキSC
〜絆の在り処〜
4
結社《身喰らう蛇》に囚われたエステル。脱出を試みたエステルだったが、《グロリアス》の強固な守りの前に再びピンチに陥る。そこに現れたのは、これまで行方をくらましていたヨシュアであった……。運命に導かれたふたりが再び巡り会う。誰もが待ち焦がれた瞬間を描く第4巻！
やっとあたしは、
ヨシュアに届くことができた。
著者：啄木鳥しんき
原作：日本ファルコム
定価：本体800円+税
ISBN:978-4-8021-3156-8
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©KITSUTSUKI SHINKI ©2018 FIELD-Y
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイ公式HPはこちら www.field-y.co.jp
ファルコムブックス公式HPはこちら www.field-y.co.jp/falcombooks



次回に続く

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

最新作「英雄伝説 創の軌跡」から早くも新商品が登場！

モルジュ特製「エコバッグプレゼントキャンペーン」開催！



さらに、「零／碧の軌跡」シリーズや「創の軌跡」に登場する、クロスベル市西通りの人気ベーカリーカフェ《モルジュ》のパン職人・オスカー＆ベネットが考案したエコバッグができました。
環境にやさしいコットン生地のバッグに、モルジュの看板をプリントしたおしゃれなデザイン。小さくたためて持ち歩けるので、ちょっとしたお買い物にもピッタリの逸品です！

■ファルコムショップ https://falcom.shop/

創の軌跡 マグカップ



「英雄伝説 創の軌跡」より盟主グランドマスターのビジュアルを使用したマグカップが誕生しました！

発売日:2020年7月17日予定
材質:陶器製／容量:350cc　価格:2,000円（税抜）

ファルコムショップでゲーム・音楽 CD・書籍・グッズなど「商品代金 税抜 1,000 円以上」ご購入いただいたお客様に、この特製バッグを1個プレゼント！
実施期間：2020年6月29日～無くなり次第終了
【注意事項】
- **発送1件につき1個お付けします。**
- **商品代金 税抜 1,000 円に達していないご注文にはお付けできません。**
- **カラーはスタッフにおまかせください。**
- **発送順にお付けしますので、8月27日発売の「創の軌跡」には付きません。**
- **予定数に達し次第終了となります。**

《特務支援課》メンバーがオリジナルのカフェ衣装に！ GraffArt Café×「零の軌跡:改・碧の軌跡:改」コラボ開催！

6月30日（火）～7月29日（水）の期間、GraffArt CAFE にて、「零の軌跡：改・碧の軌跡：改」コラボを開催することが決定しました！
ロイドたちクロスベル警察《特務支援課》カフェ衣装のグラファアート新商品、特典コースターも登場！
カフェ店員をイメージしたキャラクターたちが描かれた、カフェコラボならではの可愛らしい商品が新たにラインナップされました。

【特典情報】
期間中、GraffArt Café にてメニューご注文のお客様に、ランダムでコースターをプレゼント！
※ドリンクまたはフードのご注文1点につき1枚となります。
また、セットメニューのご注文につき3枚お渡しいたします。
※詳細は下記URLをご確認ください





■GraffArt CAFE in Ikebukuro
http://graffart-cafe.athree3.com

「ゆるみっしぃ」が待望のアニメスタンプに！ LINEスタンプ vol.30『動くゆるみっしぃ』配信開始！

ファルコムLINEスタンプシリーズvol.30

動くゆるみっしぃ

日本ファルコムの LINE クリエイターズスタンプ第30弾では、あの「ゆるみっしぃ」が待望のアニメスタンプになって登場！
いつでも、どんなときでタレ眉の「ゆるみっしぃ！」が、今後はスタンプでゆるっと動きます♪

販売価格:250円

■『ファルコム LINE スタンプ』シリーズ紹介ページ
https://www.falcom.co.jp/mobile/linestamp.html



30年以上の時を超えて愛される女神「フィーナ」が1/8スケールフィギュアで登場！



アクション RPG『イース・オリジン』から、ファンに今なお愛され続ける、古代王国イースの建国者である双子の女神「フィーナ」の 1/8 スケールフィギュアが登場！
躍動的に表現された大きく広げられた翼と魔力をまとう黒真珠、そしてそれらと対照的に物憂げな表情のフィーナというコントラストが、キャラクター性を造形から浮かび上がらせます。





価格:18,000円（税抜）
発売時期:2021年6月
発売元:Myethos
販売元:グッドスマイルカンパニー

THE LEGEND OF HEROES

暁の軌跡

アカツキノキセキ

毎月魅力的な新キャラクターや衣装替えキャラクターが大注目の『英雄伝説 暁の軌跡』。
６月はメインストーリー第７章第５弾の後篇が実装！
さらにあのキャラクターがまさかの花嫁姿に!?

『英雄伝説 暁の軌跡』公式ホームページ
http://akatuki.ujj.co.jp/

公式ツイッター
https://twitter.com/akatsuki_ujj

メインストーリー 第７章 第５弾「エイヤの民たち／後篇」が実装！

エイヤの民たちは強く、美しく、自らの理念に則り生きていた。
それはきっと、これからも変わらないのだろう。
けれど、彼らが試験班と出会ったことで得られた“変化”は、
この先の未来に紡がれていく。

その未来を守るため、試験班は《戦争卿》一派に立ち向かう。









6月の新／衣装替えキャラクターをチェック！



ワンピース・ユウナ

《新VII組》のメンバーから早くもユウナが衣装替えキャラクターとなって登場！　夏を先取りした涼しげなワンピース姿が、活発なユウナによく似合っている。

マリアベル・クロイス

『閃の軌跡IV』から結社《身喰らう蛇》の使徒・第三柱にして《根源》の異名を持つ錬金術師のマリアベルが参戦！　最上位の魔導士なだけに、そのアーツは強力のひと言だ。

花嫁・デュバリィ

アリアンロード直属の戦闘部隊《鉄機隊》の筆頭騎士も６月の花嫁姿には思わず赤面!?　強気な表情を見せる普段とは違い、恥じらう乙女の表情になっているのが素晴らしい。

7月の新規衣装替えキャラクターは？



※画像は開発中のものです。　※上記のイベントは状況により内容の変更を行う場合があります。

『創の軌跡』の発売を記念して
『軌跡』シリーズの原点を振り返る！

英雄伝説 空の軌跡1 ～消えた飛行客船～

第6回



リベール王国を舞台とした『英雄伝説 空の軌跡』、クロスベル自治州を舞台とした『英雄伝説 零の軌跡』と『英雄伝説 碧の軌跡』。そして、エレボニア帝国を舞台とした『英雄伝説 閃の軌跡』。これまでゼムリア大国西部の各国を舞台として物語が紡がれてきた『軌跡』シリーズだが、最新作『英雄伝説 創の軌跡』は、これまでのシリーズに登場したキャラクターや世界観をより掘り下げていく作品ということで、シリーズの原点ともいえる第１作『英雄伝説 空の軌跡 FC』ノベライズを好評連載中！

製品情報
好評発売中
著　　　:はせがわみやび
イラスト:ワダアルコ
定　価:1,200円(税別)

欠けた月が夜空を駆けあがる。

キールとジョゼットが船に戻ってきた。

空賊の手下たちは一斉に自分たちのボスを出迎える。《カプア一家》は、首領であるドルンと彼の弟妹たちが治めている空賊一家だった。その忠誠心は名の知れた他の空賊たちや山賊たちにも劣らない。

だから、ほんのちょっとの間だけ彼らが自分たちの持ち場を離れてキールとジョゼットを出

迎えに行ったとしても、誰も責めるものはいなかった。
「兄貴！　お嬢！」
「お帰りなさい！　結構かかりましたね」
　手下たちの口々の挨拶に、キールが疲れたような表情を浮かべつつ応える。
「ああ……。いよいよ大詰めだ」
「そ、それじゃ……」
「数日のうちに身代金をもらう」
「ボクたちの夢に、これで一歩前進だね！」
　キールとジョゼットが言い、おお、と手下たちからどよめきが返る。
「とりあえずアジトに戻る」
「撤収だよ！」
　キールとジョゼットが言って手下たちから、
「がってんだ！」
　と声が返った。
　そのまま空賊たちは、自分たちの船――《山猫号》へと乗り込む。
　キールとジョゼットが主操舵室に入る頃には船はすっかり発進準備を整えていた。
　航法士も兼ねるジョゼットが持ち場につき、計器に現れたデータを素早く読み取る。
「気温２１度、湿度１５％。南南西、風速１２アージュ。周囲の導力反応無し！」
　よどみなく告げる妹の声を聞き終えてから、キールが吠えた。
「導力炉始動！」
「アイサー！　導力炉始動！」
《山猫号》の導力機関に火が点った。
　心臓から送り出された血液が身体の隅々まで運ばれてゆくように、七耀石の結晶を核にした導力炉から産み出された力は導力線を経由して船の各部へと送られていく。
　船体の各部署から伝声管を通して時々刻々と状況が報告されてきた。すべて順調、異常なし。手下たちはキールにそう告げてくる。
「よーし……。カプア空賊団所属、《山猫号》離陸（テイクオフ）！」
　ドドドド。導力機関の立てる低い音が聞こえてくる。絶えまなく産み出される膨大な導力が、鉄の塊である《山猫号》を空へと持ち上げるのだ。
　ぶるる、っと猫が身震いするようなわずかな震動の後、ごぉぉぉ、と巨大な翼に風が送り込まれて揚力が生じる。同時に地面に対しても風が叩きつけられた。
　空賊たちの身体が一瞬だけ下方に向かって押し付けられる。
　船首が初めにわずかに持ち上がり、続いて船全体が宙へと浮いた。
　導力機関から送り込まれた導力によって生じた風に、大地の上の草は吹き飛ばされ、斜めに

なっていた。枯れ葉が激しく宙を舞う。
静寂に包まれていた森のなか、翼が風を切り裂く音が響く。
一瞬の後には森の梢を抜け、《山猫号》は夜の大海のなかに浮いていた。
そのまま船は北へと進路を向けた。

† † †

予定時刻をわずかに過ぎただけで《山猫号》はアジトに戻った。
真っ先に船を降りたキールとジョゼットは、その足で彼らの兄でもある《カプア一家》の頭領ドルンの元へと向かう。
残った手下たちは、アジトの持ち場へと向かう者、そのまま休憩に入る者、そして船に残って再発進のための整備をする者とに分かれた。
ロイルとライルの二人も整備組だった。
疲れの残る身体をぼやきながら彼らは船の船倉へと降りてゆく。積荷のチェックが残っている。足りないものは報告し、補充しておかねばならない。
「ふわ〜、眠い、眠い」
「まあ、もう少しの辛抱で、こんな生活ともオサラバさ」
あくびを繰り返すロイルに、ライルがなだめるような口調で言った。ロイルはちょっとばかり不平の多い奴なのだ。言われて、ロイルはあくびを噛み殺す。
だが、すぐにふたたび口を開いた。
「なあ、ライルよぉ」
「なんだよ」
「最近のお頭さあ……ちょっとばかり変じゃねえか？　おっかないっていうか、気安く話せねえっていうかさ」
「お前ね……」
そんなこと言うなとふたたびライルはたしなめることになった。
確かに――ライルもそう思わないこともない。最近のお頭はどこかぼうっとしていたり、かと思えば急に怒りだしたり……。まるで人が変わったかのようだ。だが、ドルンは彼らにとってボスであるというだけでなく、恩のある男なのだ。
「寝不足で疲れてるんだよ。早く終わらせて、俺たちもゆっくり休むとしようぜ」
ライルがそう言ったときだった。
「だったら、今すぐ休んでもオッケーだけど？」
思いがけない声が挟まれた。
「だ、誰だ！」

声のしたほうを振り返る。
船倉の奥、積荷の影から、その瞬間にぬっと立ち上がった影があった。ぜんぶで四つ。
あ、とロイルが口を丸く開けた。
とぼけたような声になったが、それは驚きすぎたからだ。いるはずのない人物がそこにいた。
四人のなかの三人に、彼ら二人は見覚えがあった。
「お前たちは……」
ライルは呻くような声で言った。目の前にいるのは、ジョゼットを捕まえようとしていた遊撃士たちだ。間違いない。
「お初にお目にかかる。漂泊の詩人オリビエ・レンハイムだ」
「そっちは知らねえが」
気障に髪を掻き上げた男は無視して、ライルは威勢のいい少女を睨みつける。この少女はあと少しで彼らの大切なお嬢さま、ジョゼットを捕まえるところだったのだ。
「あ、いや、ボクはオリビエといって――」
「うるせえ！　ちくしょう、お前ら、どうしてここに……！」
「何言ってんのよ、あんたたちがここまで運んでくれたんじゃない。ちっとも気付かなかったくせに」
「なっ！」

まさか、船倉にずっと隠れていたというのだろうか。ありえない。重量のチェックだってちゃんと……。
「四人分の目方に相当する積荷は、そこから捨てさせてもらったわ。ちょっともったいなかったかしら。まあ、軍に言って後で回収してもらえばいいわよね」
しれっと年上の女遊撃士が言った。
そういうことか。
計器に異常がなかったはずだ。
「きさまら――」
ライルは相手の力量を見誤っていた。所詮は女と子どもと優男だと。怒声をあげて殴りかかろうとして――。
「遅いってば！」
想像よりも速く、少女はひとっ飛びでライルのふところに飛び込んできた。
雷光の速度で少女の手が動く。背負っていたはずの杖がいつの間にか消えて、風を切る音とともに彼我の間合いを越えて何かがライルの腹へと伸びてくる。
鳩尾に衝撃が来た。
杖で殴られたのだと気づいたときには、息が詰まり、呼吸が瞬間とまってしまう。目のなかに星が飛んだ。身体から力が抜けて、前のめりに倒れてゆくのを自分で感じていた。どうしよ

うもない。
床に激突するとき、辛うじて開いた目に、相棒のロイルが倒れるのが見えた。
後頭部にとどめの一撃を受けて、ライルの意識はそこで途切れた。

†　†　†

船倉から上へ。
出くわす空賊たちを倒して、エステルたちは外へと続く扉までやってきた。
「フッ……無事、潜入できたようだね」
戦いを最後まで後ろで眺めていたオリビエが言った。
「あんた、銃と魔法には自信があるとか言ってなかった？」
エステルが半眼で睨んでも涼しい顔だ。
「切り札はここぞというときに出してこそ、切り札なのだよ」
「ちょーしいいったら」
「ま、成功したし、許しましょ。あたしも、まさかこんなに上手くいくとは思わなかったけど」
シェラザードが言った。
「で、でもさぁ。メチャメチャ焦ったわよ。途中で隠れてるのが見つかったらどうしようって、
どきどきしちゃった」
「見つかってても大丈夫だったたと思うよ。発見されたら、そのときは船ごと制圧すればいい。元々僕らだけで突撃しようとしてたんだし。船のなかは狭いから一度に相手する人数を減らせるしね……まさか、そこまで考えて提案したんですか、オリビエさん」
ヨシュアに問われて、オリビエが肩をすくめる。
「いやまったく。敵地に潜入というシチュエーションは燃えるな、と思っただけさ」
「あ、あんたねぇ……」
相変わらず正体の知れない男だった。
「まあ、いいじゃない。それより、この場所だけど……」
シェラザードが扉を開けて、外を窺う。
どうやら外から船を直接監視している見張りはいないようだ。
扉を開けて外に出た。
「ここは……？」
エステルは、自分の目が一瞬どうにかなってしまったのかと思った。
目の前が白く濁っていたからだ。
霧だ。
いつの間にか濃霧があたり一面に漂っている。

「ずいぶん、濃い霧だね」
「ひょっとして、ここ、《霧降り峡谷》かしら？」
　シェラザードのつぶやきを聞き取って、エステルは腑に落ちた。霧降り峡谷は故郷のロレントとボースの境にある谷だ。ボースから見て北にあたる。空賊団のアジトは北にあるだろうと予測していたとおりだ。
　濃い霧を警戒して動かずにいると風が吹いて周りの景色がなんとか見えるようになった。
「迂闊に動かなくてよかったね。見てごらん、エステル。あっちは谷だ」
　ヨシュアの指し示したほうへと顔を向ける。
　空賊艇の停まっている空地は四方に導力灯が添えつけられていて、地面に描かれた着地用の白い目印線を暗闇に浮き上がらせている。
　その空地のすぐ隣、ほんの数アージュ先は絶壁の崖だった。底の見えない深い谷へと続いている。足を踏み外したら、たぶん生きてない。
　背筋に冷たいものが這いあがってきた。
「あっぶなぁ……」
「まあ、シェラさんの言ったとおりだったね。さすがにこの場所には、大きな定期船は侵入できない……」
「あっちに洞窟が見えるわ。たぶんアジトはあの先ね」

　シェラザードが言った。
「フッ、人質を解放してないから、まだ気づかれるわけにはいかないね」
「付いてきてもいいけど、今度こそ本気だして欲しいわね。かばっている余裕はないかもしれないんだから」
　シェラザードがオリビエに釘を刺した。
「もちろん、ボクはいつだって本気だよ」
「だといいけど……」
　それで、おしゃべりはおしまい。
　全員が押し黙ったまま、洞窟の入り口へと向かう。もちろん、そこには見張りが立っている。夜闇にまぎれて影から影へ。充分に近づいてからいっせいに飛びかかる。
　声をあげられる前に見張りを昏倒させた。
（さあ、ここからが肝心だ！）
　改めてエステルは気合を入れ直す。
（この先に父さんが……絶対に助ける！）
　拳を握り、力を込めた。
　そのエステルの手をそっとヨシュアが上から包み込む。
「少し……力を抜いたほうがいい」

「あ、うん。そうだね」
　肩をほぐすように上下させ、ひとつ、深呼吸。
（落ち着け落ち着け……よし！）
　エステルたちは砦へと侵入を開始した。
　元は天然の洞窟だったのだろうが、入口から入ると、なかは石壁造りのまるでお城の地下のように改造されていた。
　通路のちょっと先までを一足先に見て戻ってきたヨシュアに、エステルが問い掛ける。
「ここ、ぜんぶその空賊団が造ったのかな？」
「どうだろう？」
　エステルの問いにヨシュアが首を捻った。ヨシュアにもそこまではわからないらしい。
「大昔の城塞のような雰囲気ね。元々あった隠し砦を、アジトとして使っているんじゃないかしら？」
「古代文明の崩壊から数えて数百年ほどは延々と戦乱の世が続いたそうだからね。山の奥にその時代のものが残っていてもおかしくはないだろう」
「で、それをちゃっかりと使ってるってわけ？」
「そういうことだね」
　オリビエがそう言って薀蓄を締めくくった。

　探索を再開する。
　通路には、数アージュごとに扉があって、開けると小さな部屋になっていた。
　挟み撃ちに遭うのも困るし、人質がいるかもしれないので、エステルたちは念には念を入れてすれ違う扉はぜんぶ調べた。
　だが扉の先の小部屋はどれも空っぽだった。
「どうやら、全ての部屋をちゃんと使ってるわけじゃないみたいだね」
「もったいないね。これだけの部屋があるというのに」
　ヨシュアとオリビエはそう言ったが、エステルとしてはほっとしている。これだけの部屋すべてに空賊たちがいたら、戦っても戦ってもキリがないところだ。空き部屋が多いということは、空賊たちの数はさほど多くないということでもある。
「ちょっと待って」
　ヨシュアが小声で全員の歩みを止めた。
　ちょうど、通路の角にあたるところだ。
「そこの扉から、話し声が聞こえてくるよ」
　数歩先の扉にはわずかな隙間が空いていた。どうやら、空賊たちがいるようだ。
　エステルたちは互いに目配せをする。
　扉の前まで忍び歩き。一気に扉を開けて踏み込んだ。

なかにいた空賊は二人だけだった。どうやら休憩中だったらしい。突入から制圧まで鼓動が十回も打たずに終わった。
「なんて……強さだよ……」
エステルの棒術に吹っ飛ばされた空賊が、地面に倒れたまま途切れ途切れに言った。
「フ……観念したかい。ボクの手に掛かれば、空賊のひとりや二人」
「オリビエは何にもしてないじゃないの」
「そんなっ。踏み込むと同時に魔法を撃ったじゃないか」
「そうだっけ？」
「ヒ、ヒドイ……ボクの活躍を見ていないとは……」
「それより人質よ。どこに捉えているか白状してもらうわよ」
シェラザードが叩き伏せた空賊たちを見下ろしながら言った。
「誰が喋るもんかよ……」
「あーら、そう。エステル、ちょっとそこをどいて」
「な、何をする気だ……」
「うふふ。ちょっとしゃべりたいなって気分になってもらうだけよ」
愛用の武器である鞭を手に、シェラザードがにっこりと微笑んだ。
夜明けが近づいていていた。

† † †

その部屋には、総勢で十五人の人間がいた。
すべて定期船《リンデ号》の乗員と乗客である。上は六十を越える白髪の老人から、下は十にも満たない子どもまで。
空賊たちの人質に対する扱いは決して悪くはなかったが、それでもお世辞にも良い環境とはいえない。
だが相手は荒くれ者の空賊であり、自分たちは戦いには不慣れな一般人である。できることは何もなく、ただ救出を待つしかなかった。
こらえきれずに時々子どもが泣く。見張りの空賊たちが煩いと怒鳴り、親が懸命にあやす。そんな姿も日を追うにつれ目につくようになってくる。
今も子どもの泣き声に起こされたところだ。
時計が無いのでわからないが、おそらくそろそろ夜明けといった時刻だと思われた。
子どもの背を叩き、親が宥めている。
「そろそろ限界か……」
周りを見廻して、《リンデ号》の船長グラントはつぶやいた。

まだ寝ている者も、騒ぎで起きてしまった者も、彼らの顔には一様に疲労の影が貼りついている。二日や三日ならばともかく、この砦に連れてこられてからでも、十日は越えているはずだ。日付の感覚も怪しくなってきている。
「船長……このままでは……」
「クラリス君。焦るな」
部下である乗務員に向かって言った。たとえ船から降りていても、この乗客たちを港に無事に届けるまでは自分はまだ船長なのだ。そうグラントは自分に言い聞かせる。
だが……焦るなといっても……いつまで待てばいいのか。
そもそも救出の当てはあるのだろうか……。
ダン！　と壁に何かを打ち付けるような音が聞こえた。
続いて大きな怒鳴り声。空賊たちの声だ。いや、それだけではない。若い女の声も聞こえる。
喧嘩というには派手すぎる物音も聞こえてくる。
扉の向こう――続き部屋になっている見張りたちの部屋からだった。
騒ぎは、起こったと思ったら、あっという間に静かになった。
グラントは、部屋のなかのみなを扉からできるかぎり離して退避させる。
自分は庇うように前に立った。
ごくりと唾を呑む。

いったい、あの扉の向こうで何が……。
キィ、ときしるような音を立てて扉が開き、見張り部屋の明かりが差しこんでくる。
「みんな、無事⁉」
明るい少女の声が船長の耳朶を打った。
続いて、少女よりもすこしばかり上に思える女性の声。
「遊撃士協会の者よ。皆さんを救出しに来たわ」
ひとつに固まっていた人質たちの間から驚きの声が漏れた。
遊撃士が救出に！
「助かった……のか」
誰かのつぶやく声が聞こえる。
扉が開いて、若い少女の姿が現れた。その後ろに銀髪の女性と黒髪の少年がいる。最後に金髪の青年が入ってきた。
グラントは一歩前に進む。
「私は《リンデ号》の船長を務めるグラントだ。本当にありがとう……」
「お礼は脱出の後でね。ところで……」
武器らしき棒を片手にもった少女がきょろきょろと首を振って何かを探している。
「あれ？　あれれ？」

「いないみたいだね……」
　黒髪の少年が言った。
「誰かを探しているのかね？」
「人質って、これでぜんぶ？」
「ああ、その通りだが」
　誰ひとり失っていない。救出は間に合ったのだ。それなのに、目の前の少女はがっくりと項垂れていた。
　少女の肩に手を置いて宥めながら、黒髪の少年が言う。
「カシウス・ブライトという人が乗っていませんでしたか？」
　その名前を聞いたときに、グラントは心に引っかかるものを覚えた。だが、すぐには思い出せない。
「どこかで聞いたような」
「あ、あの船長……あのお客さまじゃありませんか？　離陸直前に船を降りられた……」
　クラリスがそっと耳打ちしてきた。
「ああ！」
　ようやく思い出す。
「いたな、そういえば！」

「ええっ⁉　今は……いないの？」
「うむ。離陸寸前になって、『すまん、ちとヤボ用ができた』、そう言って降りた客の名前が確かそんな名前だった。カシウス・ブライト……間違いない」
　少女がぽかんとした顔をする。
「だ、だって、乗客名簿にはあったのに……」
「あまりにギリギリだったのでな」
「じゃ、じゃあ、カシウス・ブライトは……」
「リンデ号には乗っていない。これは確かだ」
　船長としてきっぱりと言い切れる。
　動転する遊撃士の少女を、まわりの遊撃士たちが宥めていた。
　その様子を見ながら、グラントは思い返していた。
　そう、カシウス・ブライト……そんな名前だった。
　乗船ぎりぎりに、甲板で何か荷物を受け取っていた。それを見た途端にあの男は顔色を変え、乗るのを止めたのだが……。
　いったいあれは何だったのだろう……。

†　†　†

「悔しい！　二度も逃げられるなんて！」
　エステルは地団太を踏んだ。
　人質たちを救出し、カプア一家の頭領を追い詰めたエステルたちだったが、激しい戦いの末に一度は叩き伏せたものの、隙をついて逃げられた。
　立ち込める煙幕に咳き込みながらエステルは腹を立てていた。
「上に逃げた……あの空賊艇で逃げるつもりだよ！」
　通路に出て、敵の行く先を確かめたヨシュアが戻ってきて言った。
「追いかけるわよ！」
　シェラザードが言った。もちろんエステルに否やはない。
　頭（かしら）を逃がそうと道を塞ぐ手下たちを倒し、エステルたちは追った。
　来た道を戻り、ふたたび飛行船の発着場へと辿りつく。
　しかし、そこでエステルたちを出迎えたのはあまりにも意外な人物だった。
「ご苦労だったな、遊撃士の諸君」
「リ、リシャール大佐！」
「また会えると思っていたよ。君たちの働きのおかげで我々も無事に潜入することができた。感謝する」

「ふん……出過ぎたマネをしおって」
　リシャールの横で苦々しげに言ったのはモルガン将軍だ。
　さらに後ろには兵士たちが整列している。
　どうして王国軍がここに、と呆然となるエステルたちだった。
　二人の後ろには、カプア一家の頭領たち――頭領のドルンとその弟妹のキールとジョゼットがぐるぐる巻きに縛られて転がされている。
　逃がさぬよう必死で追ってきたのに、追いついてみればすでに軍の兵士たちによって捕縛された後だったということだ。
　そんなことを言うべきではないが感情的には面白くない。
「いやはや、美味しいところを、根こそぎ持っていかれた気分だね」
　オリビエは正直だった。
「まあ、遊撃士の本分は縁の下の力持ちというものよ。目立ってもしょうがないわ」
「注目を浴びたほうが気持ちいいのは確かだけどね」
「あなたはそうでしょうとも」
　オリビエに向かって言ってから、シェラザードがやれやれと肩をすくめた。
　転がっているカプア一家の兄弟たちから目を上げれば、整列している兵士たちの後ろに、空賊艇を押しのけるようにして、狭い発着場の空間ぎりぎりに王国軍の警備艇が鎮座していた。

あの飛行船でやってきたのだろう。そう見当がつく。
「突入用の強襲飛行艇だね」
ヨシュアがエステルの耳元に囁きかける。
谷間の薄暗い朝霞のなかでの着陸だ。おどろくべき腕前だった。
（あっぶな〜。ちょっとでも失敗したら、谷に落ちちゃうか、空賊艇にぶつかっちゃうじゃないの！）
エステルは軍の飛行船操縦士の腕前に舌を巻いた。
「はー、ほー、へー、この人たちが空賊さんたちのボスですかぁ。女の子もいるなんて、なんかビックリですねぇ」
「無駄口叩いてるんじゃねえ。とにかく撮って撮って撮りまくるんだよ！」
「うへーい。わっかりましたですよぅ、センパイ！」
どこから湧いて出たのか、見慣れた新聞記者コンビもいた。
「どうだね、いい記事は書けそうかな？」
「ああ、大佐！　ええ、そりゃあもちろん！　連れてきてくれて、ほんとうに感謝してますよ！」
「あー、エステルちゃんだあ！」
力いっぱい手を振ってくるドロシーに、ひらひらとなんとなく手を振り返す。
さっさと撮れと、ナイアルに頭の後ろをはたかれていた。

「あのひとたちまでいるなんて」
「そうね。マスコミを連れてきたところを見ると……」
シェラザードが何か言いかけてやめた。それより、と話を変える。
「先生の事なんだけど」
「飛行船を降りちゃってたなんて……どこに行ったんだろう。なんで連絡がないのかな」
「うん……その問題を考えなくちゃね」
逮捕された空賊たちの処遇は軍に任せておけば大丈夫だろう。
人質たちも無事だと、彼らの居場所と共に、エステルたちはリシャール大佐に伝えておく。
砦に突入していく兵士たちを見ながら、エステルたちはここでの自分たちの仕事が終わったのを感じていた。
父の背中を追ってここまで来た。
けれども、掴もうと手を伸ばしているのに届かない。カシウス・ブライトの姿はまるで深い霧の奥へと隠れてしまったようだ。
「夜が明けたね」
ヨシュアが言った。
朝日の欠片がようやく谷間に差し込んできて、立ち込めていた霧を払った。
光を浴びて、谷間を覆う森の青が蘇る。見つめていて胸が躍った。日差しを浴びれば朝露に

濡れた森はこんなにも色鮮やかで――。
「きれいなところだったんだね……霧降り峡谷」
　エステルは眼下の森を見下ろしながらつぶやいた。
「とりあえずボースの支部に戻りましょう」
　声に少し疲れを滲ませてシェラザードが言った。

† † †

　霧降り渓谷からボース市の支部まで戻るのに丸一日を要した。
　エステルたちを出迎えてくれたのは、受付のルグラン老だけではなかった。市長のメイベルが、メイドのリラと共に直々に待っていてくれたのだ。
「ご苦労さまでした。みなさんだったら絶対に解決してくれると思いましたわ」
　メイベル市長はエステルたちに頭を下げる。
　さらに、報酬を増額すると言った。
「でも、最後に彼らを捕まえたのは軍だし……あたしたちが解決したとは言えないかも」
「そんなことはありませんわ、エステルさん。みなさんが砦を制圧していたから、軍の突入も成功したのだと思っています」

　そのとおりと、ルグラン老人も請け負った。
「そ、そっかな……えへへ」
「ただ、いくつか謎が残ったわね……」
　シェラザードはさすがに喜ぶだけでは終わらなかった。もちろん、それはエステルだって同じだが、さすがに切り替えが早い。
「エステル君たちが見たというボートに乗ってやってきたという黒装束のことだね」
　オリビエも頷いた。
　ヨシュアが付け足すように述べる。
「それと、空賊の首領の妙な態度ですね。扉の外から聞いたかぎりでは、人質を解放することなく殺すつもりでした。その発言を聞いて、怒ったエステルが突っ込んでしまったわけで」
「そ、それはぁ……」
「ところが、シェラさんが叩き伏せると、起き上がってきたときには自分がそれまで何をしていたのか覚えていないようでした。いえ、シェラさんの鞭で叩いたせいではないと思います」
「き、記憶が吹っ飛ぶほど叩かないわよっ」
　シェラザードがじとっとヨシュアを見る。ヨシュアが肩をすくめた。
「まあ、シェラ君は、記憶がなくなるほど酔わせるのはやりそうだがね。ふむ……この事件、まだ裏があると考えたほうがいいかもしれないな」

　オリビエが言った。
「しかし、そのあたりの追及は王国軍に任せるしかなさそうじゃのう。なにしろ犯人の身柄はぜんぶ向こうが抑えてしまったからな」
「人質が全員無事に帰ってきただけでも幸いですわ。それが何よりです。空賊たちが捕まったという知らせを聞いて、街の人々もようやく安心しています。……オリビエさんもご苦労さまでした」
「フッ、呑んだワインぶんの働きができていればいいのだが」
「お釣りがきます」
「そうかい！　では、また何か呑ませてもら……やだな、エステル君。冗談だよ？」
　肩をすくめるオリビエを見て、エステルはやれやれと首を振った。
「市長、そろそろ次の面会のお時間が……」
「もう？　ではみなさん、ご機嫌よう。また何かありましたら、ぜひお願いしますわ」
　優雅に会釈をしてからメイベル市長はメイドと共に去った。ボース市の名物美人市長は相変わらず忙しそうだ。
　またいつか彼女の依頼で仕事をすることもあるかもしれない……。
　エステルはふとそんなことを思った。
「っと。では、おまえさんたちにはこれを進呈しようかの」

　ルグラン老人がカウンターの奥から何か取り出してくる。
「えっ。なに？　新しい武器とか？」
「……それは報酬から買うもんじゃぞ」
「じょ、冗談だってば」
「これじゃよ。ほれ、嬢ちゃんとそっちの坊主にじゃ」
「僕たちにですか？　……これは」
「なになに？」
　エステルとヨシュアに渡されたのは二枚の紙だった。
　だが、書かれた内容を読んで、エステルは思わず驚いて声が出た。
「ボース支部の推薦状!?」
　それは正遊撃士になるために必要とされる、各支部ごとに発行される推薦状だったのだ。
「あの、いいんですか？」
「うむ。お前さんたちは充分な働きをしてくれたよ。ボース支部としては正遊撃士として認めるのにやぶさかではないのう。どうか胸を張って受け取ってもらいたい」
「ありがとう、ルグランさん！」
「頑張ります」
　晴れがましい気分でエステルの胸は一杯になった。

「良かったわね。カシウス先生が聞いたら、さぞ喜ぶと思……あ……」
エステルとヨシュアはシェラザードの言葉に無言になってしまった。
そう。
一番に喜んで欲しい人は行方不明のままなのだ。
「カシウスか……。はて、協会はおろか家族にさえ連絡を寄越さんとは。いったい、何をしておるのやら」
「それでも……」
エステルは唇を噛みしめ、絞り出すような声で言った。
「無事でいることはわかったんだし」
「エステル……」
「すんませぇん。荷物を持ってきたんすけどぉ」
扉を開ける音とともに、場違いに明るい声が割り込んできた。
全員が声のほうへと振り返る。
ルグラン老人が声の主を見て「おや、テッドじゃないか」と言った。顔見知りらしい。
「いったい、どうしたんだね?」
「はい。こちらに遊撃士協会宛ての荷物を持ってきたんで」
「うち宛ての?」

「さいです。例の空賊に襲われたってぇ船に積んでいた荷物ですよ。それがようやく戻ってきたんで、こちらにお届けに」
「それはすまないね。……いや、待てよ？　あの行方不明になった船は、ボースの港を出てロレントに向かうはずだったのだろう？　それがどうしてうち宛てに荷物が戻ってくるんだね?」
「あ、いや、違うんですよ。確かにこの荷物はロレントの遊撃士協会宛てなんですがね。荷物が見つかったので改めて届ける前に問い合わせたところ、宛て先の人物なら、こちらに来ている、と聞いたもんで」
ルグラン老人と配達人の会話をそれまで何気なく聞いていたエステルたちだったが、配達人はそこで思いがけないことを言いだした。
「こちらにブライトさんって方はいらっしゃいませんかね?」
「へ?」
いきなり自分の苗字を呼ばれてエステルは喉の奥から妙な声を出してしまった。
「あの……ブライトなら、僕たちですけど。でもまさか」
「ああよかった。じゃあ、こちらを受け取ってくださいませんか。小包ですんで。あ、こちらの手紙を添えてあったそうです」
抱えていた小荷物をヨシュアに押し付けてくる。

「え、あ……」
「では、こちらに署名（サイン）を」
促されるままにヨシュアは小包片手に、空いた手でさらさらと署名した。その合間にもちらりと小包に目を落とし——目を見開いた。驚いている。
「ああ、どもども！　毎度ありぃ！」
くるりと背中を向けると、配達人は忙しそうに建物を出て行った。
エステルは好奇心を抑えられずに脇から覗きこみ、ヨシュアの抱えた小包の宛名を読みとった。
「これ、……父さんの字だ！」
息が止まりそうになる。

† † †

ヨシュアが手紙をひっくり返して確かめる。
「うん。こっちの手紙もだ。父さんの字だね。こっちは、ロレント支部の僕と君宛てになってるけど」
「ということは、ボースで飛行船に乗ろうとしたときに預けたのかしら？」

シェラザードが首を捻る。
「でも、シェラ姉。この小包のほう、元々は父さんに送られたものみたい。父さんは自分で宛て先をロレントの支部に書き直してるんだ……。あれ？」
エステルはあることに気付く。
「うん……。僕も気付いた。これ、送り主が書いてないね」
「ちょっと待って」
シェラザードが顎に手を当てて、考え込む。
「つまり、こういうこと？　カシウス先生宛てに差出人不明の小包が届いた。たぶん、飛行船に乗る直前よね。先生はその小包を受け取ってから、宛て先をロレントの遊撃士協会に差し替えて送り直した」
「そうなりますね」
「でも、そうなるとその差出人は……先生がボースに滞在してたことを知ってたってことよね？」
シェラザードの指摘で、エステルは事態の不可思議さに気付いた。
「そっか。あたしたちにも行き先を告げずに父さんは旅してたのに、その人は居場所を知ってたんだ……」
「フッ……。ここで議論しているより、なかを開けてみればわかるんじゃないかな？」

「ああ、確かに。……って、なんでそこでちゃっかり開けるのを待ってるのよ」
オリビエが、好奇心丸出しでカウンターの上に置いた小包をためつすがめつしている。
「ほらほら早く」
「あんた、関係ないじゃない！」
「そんなっ！　エステル君、それはないよ。ボクの小鹿のような好奇心は、その小包の中身が何かを知りたくて小さな胸をドキドキと高鳴らせているんだ。このままお預けを喰らったら、夜も寝られなくなってしまうよ」
「そ、そんなこと言われても」
渋るエステルに、オリビエは大げさに嘆いてみせる。
「ああ……なんということだ。一緒に冒険をした仲だというのに。ボクにはそれを見る権利はないと言うのかい？　はて、砦に潜入できたのは、誰のおかげかな～っと」
「うぐっ」
「タチの悪い男だこと……」
「ふう。仕方ありませんね。しかし、中身の次第によっては席を外してもらいますよ」
ルグラン老人がそういうことならと、二階の空き部屋を貸してくれた。
四人で階段を上がる。
部屋のテーブルに小包を置いてから、エステルたちはまず手紙の封を切った。

『エステル、ヨシュアへ』
そう始まった手紙は、確かに父カシウスからのもので、遊撃士を続ける二人への激励から始まり、しばらく帰れない旨がしたためられていた。簡単な言葉を連ねただけだが、思いやりに満ちた文章だった。
「先生らしい文面ね」
シェラザードがしみじみと言った。
「うん……」
エステルは、読み上げる間、父の顔を思い出してしまっていた。
ただ、内容的にはごく普通の手紙だ。父の行方の手がかりにはならない。たぶん、ボースに滞在中にしたためたものだろう。
「女王生誕祭の頃までには帰る、ってなってるね……」
「というと、まだ二、三か月はあるねぇ」
「いったい、どこで何をしてらっしゃるのかしら……」
シェラザードが言って、エステルもヨシュアもしばらく口を閉ざしてしまう。
（ホント……どこにいるんだろ）
「それはともかく、小包のほうはどうだい？　差出人不明というあたりが実に興味深いと思うんだが。ひょっとしたら、君の父上の所在の手がかりになるかもしれないよ」



「でも、これ元々父さん宛てなのよね……開けていいのかなぁ」
「いや……。調べたほうがいいかもしれない」
「ヨシュア?」
「ロレントの家じゃなくて、遊撃士協会宛てにしてあるところが気になるんだ」
「あ――」

確かにそれは気づかなかった。

もちろんエステルたちがロレントに居れば、受け取ってから家に持って帰ってしまうだろう。
だが――遊撃士は依頼を受けて街の外に出ていることも多い。

「遊撃士協会に置いてあったほうが安全……って思ったんじゃないかな?」
「だとすると、何か厄介なものってことになるわね」
「そうそう、良いことを言うじゃないか、シェラザード君。しかも、失踪と同時に届けられた荷物だよ？　何か関係があるかもしれないだろう」
「わかった。調べてみよ！」

オリビエに煽られているのはわかったが、エステルも頷くしかなかった。

包みを解くと、なかからは白い箱が現れた。頑丈な木の箱だ。

箱の蓋を開ける。

布に大切そうにくるまれた、黒く丸い物体が姿を見せた。

「なに、これ？」
「……導力器の一種だと思う」
すべすべの球体ではなく、あちこちに紋様のような窪みのある機械だった。
「黒い……導力器……？」
「メモが入ってるよ」

『例のサンプルを入手した。
しばらく保管をお願いする。
機会を見て、R博士に解析を依頼して頂きたい。
K』

「これだけ？」
エステルは途方に暮れてしまう。いったい、これは何だろう？
「シェラさん。このKとかR博士という人に、心当たりはありませんか？」
「うーん。残念ながら……。先生は顔が広いから、イニシャルだけじゃねえ」
「こっちの黒い導力器は何に使うものかな？」

「魔法用の導力器に似ている気がするんだけど……」
ヨシュアの推測に、オリビエが異を唱えた。
「いや、それとも違うな。魔法用の導力器には七耀石の結晶を嵌めるための窪み（スロット）が付いているものだが、これには何も付いてない。これはひょっとしたら……《アーティファクト》かもしれない」
黒い球体に触れながらオリビエが言った。
「アーティファクト？」
「それはいったいどういうものなんですか？」
「古代文明の時代に作られた導力器の一種だよ。たまに遺跡から発見されて、七耀協会に保存されていることがある。導力革命以後の導力器と違って、古代のそれは遥かに発達していたとされているね。未だに我らは古代文明人の域に達してないとされている」
話を聞いていたヨシュアも頷いた。
本で読んだ知識と結びついたのだろう。
「でも、これはそこまで古いものじゃないわよ」
シェラザードの言葉にオリビエも頷く。
「だが、訳アリな品であることは間違いなさそうだよ。使い方がさっぱりわからない。どうすれば動くのかさえ、ね」

オリビエが怖いくらいに真面目だ。
それほど、正体不明の謎の導力器だということだろう。これが導力器だとすれば、だが。
こんなものを受け取って、父はこれをどうするつもりだったのか……。
エステルは頭を掻きむしった。
「あーもう！　あの不良親父ときたらっ！」
「エ、エステル？」
「なんでこんな訳わかんないことに巻き込まれてんのよっ！」
心配でしかたがない。
それなのに、エステルは何もすることができないのだ。
「ふう……。ねえ、エステル」
ヨシュアがやれやれという顔をして言った。
「考えたんだけどさ。せっかくボースまで旅してきたんだ。このまま旅を続けない？」
「えっ……？」
「どうせ正遊撃士になるためには、リベール王国を周らなくちゃいけないんだろう？　かつてシェラさんがやったようにさ」
「ヨシュア……」
「ロレントとボースからは推薦状をもらったことだし。残るはルーアン、ツァイス、グランセ

ルの三つだけだ。街を周りながら遊撃士の仕事をこなしていけば、その途中で、父さんの行方もわかるかもしれない」
ヨシュアが優しい声で言った。
「あ……」
「エステル？」
「あったまいい！　ヨシュアってば天才！」
エステルは思わずヨシュアに抱きついていた。
「それ、いい！　そうしましょ！」
「ちょ、ちょっとエステル。重いよ」
なんだか妙に焦っているヨシュアだったが、エステルはそれどころではなかった。
父を探せる。
それも遊撃士としての修業を続けながらだ。
一石二鳥どころか、もっともっと有益な提案だと思った。さすがはヨシュアだ。
「旅を続けよう、ヨシュア！　大賛成！　そしてリベール中を歩き回って、あの不良親父が何をしているのかその秘密を暴いてやるわ！」
「微妙に目的がズレてるような……」
「まあ、元気を取り戻したからいいんじゃない？」

シェラザードが言った。
オリビエにまで肩をすくめられていたが、エステルは気にならない。
何もできずに諦めかけていた。
まるで真っ暗な闇のなかで、ぽつんとひとりで膝を抱えているような気分だった。
これから何をすべきか、手がかりが得られただけで全然気持ちが違ってくる。
空の女神よ……感謝します。
やるべきことがわかれば――エステル・ブライトには怖いものはない。
不安という霧が晴れて、目の前に道が見えた。

幕間

五年前――。

真っ黒な空に幾千もの星が撒き散らされた夜。
十一歳のエステル・ブライトは食卓に頬杖をつきながら、むうと顔をしかめた。
ご機嫌ナナメだった。父がまだ帰ってこない。
(遅いってば!)
夜までには帰る。遊撃士協会の支部を通してそう連絡があったから、楽しみに待っていたのに。もう、外は真っ暗だ。温めたご飯もすっかり冷めてしまった。
(ちょっと遅すぎじゃない?)
(なにやってるんだろ)
(アブナイ目にとか……遭ってないよね)
エステルの頭のなかに心配事が駆け回り始める。
ノックの音が響いた。
(帰ってきた!)
ふくれっつらになっていたエステルは一転して笑顔になる。

　頭の左右に垂らしたおさげを揺らしながら玄関まで飛んでいって、思いっきり扉を引きあけた。
　栗色の髪をした壮年の男性――エステルの父、カシウス・ブライトが開いた扉の向こうに立っていた。
「おとーさん、なにやってたの！　遅いよ！」
「エステル、土産だ」
「えっ？　釣りザオ？　スニーカー？」
「あのなぁ。それが女の子の欲しがる土産か？　……育て方を間違えたかな。違うよ、こいつだ」
　父の視線を追うと、毛布を身体に巻きつけた男の子が、抱えられるようにして立っていた。
「…………へ？」
　毛布がほどけ、男の子の頭のてっぺんから顔までが見えた。
　リベールでは珍しい、夜を映したような黒い髪と、かすかに開かれた琥珀色の瞳。
　少年の顔色は青ざめていて、うつむいたままカシウスに抱えられていた。
「どこか、悪いの？」
「ちょっとな。休ませてやりたいんだが……」
「お布団、用意するね！」
　二階の空いている部屋にとって返し、手早くベッドのメイキングをする。抱きかかえてきた

男の子を父が寝かしつけると、エステルは熱のあるおでこを冷ますために、濡れたタオルをもってきた。水差しとコップも忘れない。
　一度瞳を閉じてしまうと、男の子は深い眠りに落ちた。
　どうやら身体のあちこちを怪我していて、おまけにかなり衰弱しているらしい。手当は済ませてあるようだが、軽い怪我ではないと思われた。
「あまり、周りではしゃぐなよ」
「だいじょうぶだいじょうぶ」
「ちっとも大丈夫に聞こえないんだがな」
「見てるだけだってばー」
　父が階下に降りた後もエステルは少年の寝顔を見ていた。こうして改めて見ると本当にきれいな顔立ちをしていると思う。
　絵本に出てくる眠り続けるお姫さまみたいだ。
（なーんてね。でも、ほんとにキレイ。……男の子、だよね？）
　疑ってしまう。
（確かめてみようかな）
　布団の端に手をかけたところで、階下の父親が声をあげた。
「エステル！　メシにしたいんだがなー！」

「うわわ！」
ヤバイ、すっかり忘れていたと気づく。
「いま、行くー！」
曲がっていた布団をきれいに整えてから慌てて階下に降りていった。
食べ終わると、ふたたび二階へ戻った。飽きずに少年の寝顔を見つめてしまう。
ときおり苦しそうにうなされることがあった。
息が荒くなり、眉間に皺がより、小さな口許から何かを堪えるような押し殺したつぶやきが漏れる。
額に浮いた汗をエステルは濡れたタオルで何度もぬぐってやった。
そうして看病しているうちにいつの間にか寝てしまったようだ。物音に気づいて、つっぷしていたベッドからエステルは身体を起こした。
見れば、男の子は相変わらず目を覚ましていない。
エステルの肩から、掛けた覚えのない毛布がするりと滑り落ちた。
「あれ？」
「おっと、起こしちまったか」
声に振り返る。父が扉を開けて出ていくところだった。
「おとうさん」

「起きたんなら、ちゃんと自分のベッドに戻れ。もう遅い。風邪を引くぞ」
「うん……」
応えながら視線をベッドに戻す。
「……おとうさん。ねぇ……」
心配そうな声だったからだろう、エステルの傍までカシウスが戻ってきた。
「こいつなら大丈夫だ」
「ホント？」
「ああ。そら……目を覚ますぞ」
「ん……」
小さく声を漏らしてから、男の子は瞳を開いた。
「わっ……。きれいな色……」
男の子の琥珀色の瞳を改めてエステルは覗き込む。濃い蜂蜜の色にも似た、透き通った明るい茶色。
その眼差しがエステルを捉え、それからカシウスのほうを向く。
上半身を起こした。
濡れタオルが額から落ちる。
「ここは……」

「俺の家だ。とりあえず安心していいぞ」
　カシウスの言葉に男の子は眼差しに冷たいものを忍ばせた。
「僕を自分の家に連れてきたっていうんですか？　正気とは思えない。なぜ……」
「なぜ、と言われてもなぁ。まあ、成り行きってヤツだな」
「あなたはバカですかカシウス・ブライト……信じられない！　僕があなたに何をしようとしたかわかってるでしょう！　なのに僕を……」
　人外の生き物でも見るような目つきでカシウスを見上げる。
「そんなに変か？」
「ありえない！」
「こらっ！」
　エステルはサイドテーブルに置いていたお盆を掴むと、躊躇なく男の子の頭に振り下ろした。
　甲高い、いい音があがる。
「……痛い」
「あんた、助けてくれた人になんて口をきいてんの！」
　エステルに怒鳴られ、そこで初めて少年は少女をちゃんと見たのだ。
「…………君は？」
「エステルよっ。エステル・ブライト！」

「俺の娘だ」
「娘……」
「なによっ。やるなら、相手になるんだから！」
　お盆を掲げながらエステルは言った。
　男の子は視線を落とした。掛けた布団の上に落ちた濡れタオルを手に取る。
「これは……君が？」
「そう、エステルだ。俺は寝てれば治るって言ったんだがな」
「熱があったのにそんなのダメ。まったく、おとこのひとってどーしてそんなにオオザッパでイーカゲンでヤバンなの！」
「おまえ、どこでそんな言葉遣いを覚えて……いや、わかってる。あいつか……」
　父のため息を聞き流して、エステルは男の子に問いかける。
「あんた名前は？」
「え……？」
「名前よ、名前。あたしはさっき名乗ったでしょ。それとも教えてくれない気？」
「あ……それは……」
　一瞬、少年は躊躇し。
　琥珀色の瞳が揺れた。

「僕の名前は……」
　無意識に彼の手はポケットのなかのものを掴む。肌身離さずにもっていた楽器を。
　ぎゅっとそれを握りしめてから、口を開いた。
「僕の名は……ヨシュア」
「よしゅあ？　ヨシュアね。……うん、いい名前じゃないの。じゃあ、ヨシュア」
　エステルはベッドに手をつく。顔をぐっと近づけて、ヨシュアの琥珀色の目を覗き込みながら額をこつんとくっつけた。
「ちょ……」
「動いちゃだめ！　……ん、熱は下がったみたいね」
　くっつけていた額を離すと、少年の頬がかすかに赤くなっている。
　エステルは腰に手を当てて宣言する。
「じゃ、もうちょっと寝てなさい！　いいわね、うごかないでちゃんと寝るのよ！」
　びしっと指を突きつけてから、肩をどんと押す。
「うわっ」
「黙って――」
　ベッドに寝かしつけると、ふとんをばふっとかぶせた。
「――寝てなさい！」

「っぷ！　い、息ができな――」
「うごくなって言ったでしょ！」
「く、口までふとんかぶったら、窒息しちゃうよ」
　顔半分だけ覗かせて、ヨシュアが言った。
　エステルはふたたびお盆を構えて、ぎろっと睨みつける。
「わ、わかった！　わかったよ……」
　少女の傍らで父親がにやりと笑みを浮かべた。
「諦めろ。この家では、エステルに逆らえるやつはいないんだ」
　まるで世界の真理を教えるかのように言った。
「それ……言っていて情けなくならないですか？　カシウス・ブライトともあろうひとが……」
「ふむ」カシウスは天井を見上げながら言う。「まあ、育て方に若干の疑問を覚えるときもないではないが……っと、わかった。おしゃべりはやめるよ、エステル」
「ん。よろしい」
　腰に付けていた両の拳を下ろすと、エステルはにっこりと微笑んだのだった。
　ヨシュアは、エステルのその笑顔を黙ったまましばらく見つめ、それから頭を倒して枕に埋めると琥珀色の瞳を閉じた。
　彼が寝付くのを待ってから、エステルは自分の部屋に戻った。

その日からヨシュアは、ヨシュア・ブライトになった。
エステルは、ヨシュアと本当の姉弟のように育ち――。
五年の月日が流れた。

第2巻『黒のオーブメント』に続く！

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！

1



3名様

『閃の軌跡IV』
特製miniトートバック

『閃の軌跡IV』のキービジュアルをモチーフにした非売品のオリジナルminiトートバッグを3名にプレゼント!!

2



3名様

『英雄伝説 空の軌跡 the 3rd Evolution』
クリアファイル

『英雄伝説 空の軌跡 the 3rd Evolution』のパッケージイラストで使用されたキービジュアルのA4判クリアファイルを3名にプレゼント!!

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.113プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→
　（記事一覧から１つずつ）
3：アンケート①ステイホーム期間中にしていた
　　ファルコム作品は？
　アンケート②『創の軌跡』で
　　もっとも注目しているキャラクターは？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1：創の軌跡最新情報
2：も～っと集まれ！ファルコム学園
3：英雄伝説 空の軌跡SC
　～絆の在り処～
4：ファルコムニュース
5：暁の軌跡最新情報
6：英雄伝説 空の軌跡

応募締め切り 7月29日（水）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.113

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/